

聖書 第1章 聖書

I.

はじめに

ある人は、聖書のことを「神様の知恵の宝庫」と呼びました。実にそうです。私たちは、聖書と言うと、一冊の本と思いがちですが、実は66巻にわかれてできあがっています。創世記で始まり黙示録で終わる聖書の66巻は、大きく二つに分かれているのです。

最初の部分は旧約聖書と呼ばれ、39巻から成っています。後半の部分は新約聖書と呼ばれ、27巻から成っています。どんな種類の聖書でも、最初にそれぞれの巻の索引があり、ページが記された目次があります。

II.

だれが、聖書を書いたのでしょうか。

人間的に考えると、聖書は歴史的な本と言えます。少なくとも36人の著者によって、約1600年の間に書かれました。しかしこの人々が、神様に直接啓示されて書いたということ、心にとめることが重要です。つまり、聖書は、神様の靈感によって書かれた本なのです。神様は、聖書のことば一つ一つを書くことにおいて、それぞれの著者を導きました。靈感によって書かれたというのは、そういう意味です。次の聖句は、聖書が神様の靈感によって書かれたことを、明らかに示しています。

「なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神様からのことばを語ったものだからです。」2ペテロ1:2
1u聖書はすべて神様の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神様に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです。」2テモテ3:16-17

したがって、聖書は神様の御言葉（みことば）そのものなのです。ある人は、聖書の中に神様のことばが入っている個所があると言います。そういう言い方は、聖書のある部分は神様の靈感によりますが、ある部分は神様の靈感によらないということ、暗にほのめかしています。靈感によるものと、そうでないものとを、誰が区別することができるのでしょうか。長年の研究調査の結果、聖書には、人間的な解釈がなされていないということがわかります。その確信は、人間的な判断によるものではありません。詩篇119:89が述べています。「主よ、とこしえに、みことばは天に確立しています。」

もう一つ心にとめる大切なことは、聖書は、神様が人間に送ってくださった唯一の啓示だということです。したがって、私たちがかってにことばを付け加えたり、取り除いたりしないようにと、神様は聖書の中で三回注意しています。最後の警告が、黙示録22:18-19に書かれてあります。

III.

聖書の主題は、何でしょうか。

聖書は66巻で成り立っていますが、その主題は一つです。その大きな主題は、キリストです。旧約聖書の中には、キリストに関する多くの預言が書かれています。新約聖書には、キリストが救い主としてこの世に来られた話が書か

れています。旧約聖書では、キリストは来るべき方として預言され、新約聖書では、人としてのキリストのことが書かれています。キリストが死んで、埋葬され、復活し、再び天に上られることもはっきりと記されています。さらに、地球で起こる新しいできごとを示すことによって、完了します。イエス様は、千年の間地上を支配なさいます。それから「大きな白い御座の裁き」といわれる最後の審判を行ないます。その後、「新しい天と新しい地」が確立されます。聖書は、永遠のご計画を、私たちに啓示しているのです。黙示録21, 22章

IV. 聖書は、どのようにわかれているのでしょうか。

聖書は、天地の始まり（天地創造）からこの世の終わりまでを書いた世界の記録です。旧約聖書の一番初めの部分である創世記には、天地が創られたこと、人の心に罪が入りこんだこと、ノアの大洪水、そしてイスラエルの民の始まりが書かれています。次の出エジプト記からエステル記の中では、キリストが誕生する400年までのイスラエルの歴史が書かれています。ヨブ記から雅歌には、すばらしい詩と知恵が書かれています。旧約聖書の最後にあたるイザヤ書からマラキ書までは、預言が書かれています。これらの巻では、イスラエルの現状と将来の摂理に関する神様からのことは、つまり預言が書かれています。

新約聖書は、まず、主なるイエス・キリストの生涯が書かれている四つの福音書で始まっています。使徒の働きは、キリスト教と教会が始まったときの様子が書かれています。偉大な使徒パウロの改宗と、キリストの福音との出会いについて、パウロの個人的な証を述べています。ローマ人への手紙からユダの手紙までは、教会や個人宛の手紙です。キリスト教の偉大な真理や、クリスチャン生活に関する実践的な教えについての話が書かれています。黙示録は、将来の天と地と地獄で起こるべきすべてのできごとが書かれています。

V. 最後

聖書には、神様の御心（みこころ）、人間の状態、救いの道、罪人の運命、そして信者の幸せが書かれています。その教義は聖であり、その戒めには拘束力があります。書かれていることは真実であり、その決定は永遠に変わることがありません。賢明に生きるために聖書を読み、救われるためにイエス様を信じて、聖くあるために聖書の教えを実行すればよいのです。聖書はあなたを導く光、あなたを支える糧、あなたを励ます慰めを持っています。聖書は、たとえば旅人の地図、船長の羅針盤、兵士の剣、そしてクリスチャンの信条です。聖書の世界では、天国が回復され、天の門が開かれ、地獄の門も示されています。聖書の大主題はキリストであり、そのご計画は私たちのためにあり、その目的は神様の御栄光を表すものなのです。聖書は、時間をかけてゆっくりと、祈りを込めて、何度も読めばよいのです。聖書は宝の山、光輝くパラダイス、喜びのあふれる川です。聖書を真剣に学べば答を見出すことができますが、その聖なる内容を軽んじるすべての人は、罰せられることとなります。聖書は偉大なる本であり、人間への神様の啓示、つまり神様の本なのです。

神様
第2章
神様

神様を知ることと、人間と神様との関係を知ること以上に、大きな人生の課題

はありません。

I. 神様の存在

A. 神様の存在を否定したり、間違っただけの教えを持っている学説を以下にあげます。

(1) 理神論：

この説は、神様が存在することを認めますが、神様が被造物を支配していることを否定します。

(2) 無神論：

創造された結果を見て、どうしてそうなっているのかという原因を考えようとはせず、神様はいないと主張します。

(3) 懐疑論：

神様、特に啓示の神様がおられることを疑ったり、あるいは信じられないと主張します。

(4) 不可知論：

この説は、神様の存在は否定しませんが、神様を知りえることはできないと主張します。

(5) 汎神論： すべては神様」、「神様はすべて」と言います。

(6) 三神論： 三つの神様がいることを教えます。

(7) 二元論：

同等の二つの神様を信じます。よいことは善の神様で、悪いことは、悪の神様と信じています。

(8) 一神教：

神様は一つと言う説です。クリスチャンは、このことを信じていますが、悪魔もこれを信じています。 ヤコブの手紙**2:19**

B. 聖書は、神様の存在を証明しようとはしません。聖書のいたるところで、神様がおられると言う事実があるからです。すべてのものが存在する前に、「初めに、神様がおられました。」聖書の最初の一節「初めに、神は天地を創造された。」は、天地創造の前から神様が存在したことを明らかにしています。神様の存在は、証明する必要がない真実として紹介されているのです。詩篇**14:1**に、神様がないと言う人は愚かだと呼ばれています。この聖句は、ヨハネ**1:1-5**と照らし合わせる必要があります。ヨハネ**1:1-5**で、イエス様は、天地創造の初めから神様と共におられたと、はっきりと書いています。それによって、イエス様が天地創造の初めから永遠にいたるまで、神様の御子であったということがわかります。聖霊も天地創造に参加されました。「神様の霊が水の面を動いていた。」創世記**1:2** 三位一体の神様が、天と地を創造されたのです。

C. しかし、神様の存在は、聖書を通さなくても明らかです。

(1) 人類は、昔から万能の神様を信じています。

(2) 被造物ができるのには、創造主が必要です。原因がなければ、宇宙はできませんでした。

(3) 被造物の中に見られるすばらしいデザインには、優秀な設計者が必要です。

(4) 全世界の中には、善と悪があります。ですから、善と悪を区別する道

徳律があるはずですが。道德律があれば、その道德律を与えた方もおられるはず
です。

(5) 人間は、理性と道德心のある者です。その人間を造った創造主は、人
間よりはるかにすぐれているはずですが。

II. 神様の性質

A. 神様は、霊です。ヨハネ4:24

神様は、肉体を持たないという意味です。神様は見えない方ですが、人間に見
えるような形に、ご自分を現すこともできます。すなわち神様は、肉なる身体
を持ったイエス様としてこの世に来られました。ヨハネ1:14-
18 ; コロサイ1:15 ; ヘブル1:3.

B. 神様は、光です。「神様は光であり、神様には闇がまったくない...」1ヨ
ハネ1:5

C. 神様は、愛です。「愛することのない者は神様を知りません。神様は愛だ
からです。」1ヨハネ4:8

D. 神様は、焼き尽くす火です。「実に、わたしたちの神様は、焼き尽くす火
です。」ヘブル12:29

E. 神様は、憎みます。「主の憎まれるものが六つある。心からいとわれるも
のが七つある。」箴言6:16

F. 神様は、聞いてくださいます。「主の目は正しい者に注がれ、主の耳は彼
らの祈りに傾けられる。主の顔は悪いことを働く者に対して向けられる。」1
ペテロ3:12

G. 神様は、人格のある方です。聖書の中で、神様に関して個人的な名前が使
われています。出エジプト記3:14 ; マタイ11:25

神様は、知識（イザヤ55:9-
10）、感情（創世記6:6）、意思（ヨシュア3:10）という個性を持っています
。

H. 神様は、お一人です。聖書の中で、神様は唯一だと明確に教えています。
1テモテ2:5（この聖句を読んでください。）多くの神様がおられるという教え
は、論理的ではありません。全能の方が、お一人しかおられないはずですが。

I. 神様は、三位一体です。存在する神様は唯一であるばかりでなく、その唯
一の神様の中に、三つの人格、つまり御父、御子、そして御霊のご性質を持っ
ておられることも教えています。これは、人間の知性をはるかに超えた奥義で
すが、理解できなくても、神様のみことばにそう書いてあるので、信じること
はできます。三位一体という言葉は、聖書の中には使われていませんが、次の
聖書の箇所、そのことがわかります。（1）イエス様のバプテスマ、マタイ
3:16-17 （2）大宣教命令、マタイ28:19 （3）祝祷、2コリント13:14

（4）ローマ1:7で、み父が神様と呼ばれ、ヘブル1:8で、み子が神様とよば
れ、使徒5:3-4 み霊が神様と呼ばれています。

III. 神様の属性

神様の定義をすることは、むずかしいです。一番いい説明は、神様の性質や特徴を説明することです。私たちは、会ったことのない人をほかの人に説明するときに、髪の毛や目などの特徴を話します。同じように、聖書も私たちに神様の特徴を明記します。これを、神様の性質と呼びます。

A. 神様は、遍在します。神様は、同時にどこにでもおられます。エレミヤ**23:24**

B. 神様は、全知のお方です。言いかえれば、神様は何でもごぞんじです。人間の一つ一つの思いと行いをごぞんじです。箴言**15:3**
自然の中で起こるすべてのことや、すずめが死ぬことさえごぞんじです。マタイ**10:29**
宇宙は無限ではるかに大きいのに、神様は、砂の一粒一粒を永遠の昔からごぞんじです。

C. 神様は、全能のお方です。神様は、すべての力を持っておられます。神様は宇宙を創造して、今ご自分の力で支えておられます。神様にできないことは、一つもありません。マタイ**19:26**

D. 神様は、永遠のお方です。始まりがなかったし、いなくなることもありません。モーセは、「どなたが私を遣わしになったと言ったらよいでしょうか。」と聞いたときに、神様は答えました。「わたしはある。わたしはあるという者だ。」。神様は、「わたしはありました。」とか「わたしはこれからある。」というような答をしませんでした。神様は、永遠に「わたしはある。」という方です。出エジプト記**3:13-14**

E. 神様は、変わることがありません。「まことに、主であるわたしは変わることがない。」マラキ**3:6**

F. 神様は、聖なるお方です。完全に純粋で罪がありません。罪を憎んで、善を愛しておられます。箴言**15:9-26**
罪人から離れますし、罪を罰さなければなりません。イザヤ**59:1-2**

G. 神様は、誠実です。神様のすべての行いは、正しくて公平です。御自分のすべての約束を守られます。詩篇**119:137**

H. 神様は、愛です。罪は憎みますが、罪人を愛しておられます。ヨハネ**3:16**

注意： 私たちは、祈りの中で、神様に対する尊敬を表すことばを用いましょう。神様に、人間と同じように話し掛けるのは、ふさわしくないことです。もし大統領や王様の部屋に入ったら、どのように話しかけるでしょうか。私たちは、祈るたびに、神様のみ前にいるという気持ちを忘れないようにしましょう。

主イエス・キリスト
第3章
主イエス・キリスト

主なるキリストは、聖書の中で中心になる主題です。これからイエス様の神性、受肉、行動、そして任務について考えてみましょう。

I. キリストの神性

旧約聖書の中で、神様は、「わたしはあるという者だ。」とモーセに言われました。神様は、ご自分の神性を現わすために、よくこの名前を使われました。たびたびこの名前を使うことによって、「わたしは神様です。」とっておられるのです。

- A. 「わたしは天から降って来たパンである」 ヨハネ6:41
- B. 「わたしは世の光である。」 ヨハネ8:12
- C. 「わたしは羊の門である。」 ヨハネ10:7
- D. 「わたしはよい羊飼いです。」 ヨハネ10:11
- E. 「わたしは復活であり、命である。」 ヨハネ11:25
- F. 「わたしは道であり、真理であり、命である。」 ヨハネ14:6
- G. 「わたしはまことのぶどうの木」 ヨハネ15:1

キリストの神性というのは、キリストが神様であるという意味です。次の聖書の箇所は、この大切な事実を明確にしています。

A. 神様の属性は、キリストを使って聖書の中で述べられています。

- 1. 神様は、永遠の存在です。キリストには初めがありません。ヨハネ1:1-3 ; 17:5
- 2. 神様は遍在です。クリスチャンたちがどこにいようと、主が共におられます。マタイ28:20
- 3. 神様は全能です。主は、無限の力を持っておられます。黙示録1:18
- 4. 神様は全知です。主は、無限の知識を持っておられます。ヨハネ1:17
- 5. 神様は不変です。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」ヘブル13:8

B. 神様は、キリストを通して働かれました。

- 1. すべての物を創造されました。ヨハネ1:3
- 2. 宇宙を支えておられます。コロサイ1:17
- 3. ご自分を、死からよみがえらせました。ヨハネ2:19

C. 神様の名前を、キリストに与えています。

- 1. 父なる神様は、み子イエス様のことを、神様と呼びかけています。ヘブル

1:8

2. 神様は、人が主イエス様のことを神様と呼び、礼拝することを拒まれませんでした。ヨハネ**20:28**
3. 悪霊も、イエス様を神様として認めました。マルコ**1:24**
4. イエス様は、ご自分を神様と宣言されました。ヨハネ**10:30**

II.

キリストの受肉

キリストの受肉というのは、キリストが肉なる体を持った人間として、この世に来られたという意味です。

A. キリストの降臨（この世に来られるということ）は、旧約聖書の中で預言されていました。イザヤ**7:14**

B. キリストのご誕生は、歴史の中にも記録されています。キリストの誕生は、人間の誕生と違います。

1. 聖霊によって身ごもりました。ルカ**1:35**
2. 処女マリアによって、お生まれになりました。マタイ**1:23**
3. 人間のように、肉体、ヘブル**10:5** 魂、マタイ**26:38** および霊
ルカ**23:46** を持っておられました。

C. キリストが、人間として来られたのは、

1. み父を表わすためでした。ヨハネ**14:9**
2. ご自分をいけにえとして献げることによって、人の罪を取りのぞくためでした。ヘブル**9:26**
3. 悪魔の働きを打ち壊すためでした。1ヨハネ**3:8**

注 意：キリスト教信仰の最も原則的な真理は、イエス様が真の神様であられ、処女降誕の奇跡によってこの世に誕生されたことです。この処女降誕のために、キリストは、アダムから続いている人の罪の性質を受け継ぐことがありませんでした。キリストは、まったく罪のない人間でした。彼の罪のない人生と、死からの肉体的な復活が、これらの真実を確認します。

III. キリストの働き

この項では、イエス様の死、復活、そして昇天を取りあげます。
十字架で啓示されている神様のみことばが成就したことは、動かしがたい事実です。十字架とは、ただ十字の木のことではなく、その木の上で献げられたいけにえのことを意味します。旧約聖書にある荒野の天幕時代の話から、神様のみことばは、キリストが十字架に架けられることの象徴で満ちています。主は、出エジプト記**12**章で過ぎ越しの子羊として、民数記**21**章とヨハネ**3:14-15**では、青銅の蛇として表現されています。詩篇**23**篇では羊飼ひ、ゼカリヤ**13:6-7**では打たれた羊飼ひと表わされています。そして、イザヤ**53**章では苦しむ救

い主、詩篇**24:9-10**では栄光の王でもあられたのです。

A. キリストの死

1. キリストが生きていたことによって救われるのではなく、キリストの死によって、誰もが救われるのです。ヨハネ**3:14-18**
2. その死は、神様の永遠の計画の一部でした。ヘブル**10:7**
3. 旧約聖書の**a**言を成就するために、その死は必要でした。イザヤ**53:5**
4. その死は、人間に救いを与えるために必要でした。エペソ**1:7**
5. キリストの死は、人間のためでした。キリストは身代わりとして死なれたのです。1コリント**15:3**
6. キリストの死は、価値あるものでした。キリストが、人の罪に対する神様の裁きの身代わりとなったことで、神様のご計画が成就したのです。神様であるイエス様の死の価値は、人の要求にも十分応えうるもので、量り知ることができません。

B. キリストの復活

1. 預言を成就し、十字架のみ業を成し遂げ、ローマ**4:25**
また、天において今も働き続けるために、キリストの肉体的な復活は必要でした。
2. キリストの肉なる体が復活したことは、事実でした。ただの霊ではなかったのです。
ルカ**24:39** 釘と槍の傷跡が残っていたので、十字架に架けられたと同じ肉体だったことがわかります。ヨハネ**20:27** しかも、超人的な力の備わった体に変わっていました。
3. 復活の後、キリストは、何人かの弟子に少なくとも**10**回現われました。よみがえられた後に、**500**人以上の信頼できる目撃者がイエス様を見て、本当にイエス様が死人の内からよみがえられたことを証言したのです。1コリント**15:6-8**
4. キリストの復活は、重要な真実です。もし復活がなかったら、キリスト教はありません。キリストの復活が、キリスト教をほかのすべての宗教と区別します。ほかの宗教は、指導者やいわゆる救い主の墓を崇めます。私たちの神様は、死んでおられません。私たちの救い主は、死と墓より勝利を得られ、永遠に生きておられるのです。この世の裁判で、事件の証拠を証明するのは、目撃者の証言です。個人的な意見は、重要な意味を持ちません。**500**人以上の目撃者が、復活したキリストを見たと言ったので、キリストの復活は明らかなできごとなのです。

C. キリストの昇天

1. 地上での働きが終わったとき、キリストは天に上られました。ルカ**24:51** ;使徒**1:9-11** 主が、ヨハネ**14:2-3**で弟子たちに言いました。「私の父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのものと迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」目撃者は、その約束を守るために天に上られたキリストを見たのです。

2. イエス様は、ご自分の栄光に入るために、ヨハネ17:5
そしてご自分の民に宣教を続けるために、昇天されました。

IV. キリストの任務

キリストは、聖書の中で、預言者、祭司、および王として紹介されています。

A. イエス様は預言者として、神様が人間に語られることばを伝え、人間に神様を現わします。ヨハネ1:18

B. イエス様は祭司として、神様の前でクリスチャンの代表をしてくださいます。ヘブル4:14-16

C. イエス様は王として、主に忠実である者の心の中を今も支配しておられます。再臨の日から千年間、地上を支配してくださいます。黙示録10:2-3;

詩篇72篇

には、その地上での支配のことが書かれています。それから、イエス様は永遠に私たちの王の王、主の主であられます。

聖霊 第4章 聖霊

宗教の中で、聖霊が存在するのはキリスト教だけです。この聖霊の教義を考えると同時に、イエス様が聖書の中心主題だということを、頭に入れておいてください。私たちは、聖霊が何であって、どんな方で、そして何を行うのかを知らされていますが、聖霊にほかの呼び名はありません。聖霊の個人的な名前を聖書が黙していることには、意味があるのです。主イエス様の御名と働きがほめたたえられるように、あえてご自分のお名前を現わしていないのです。

ヨハネ15:26

I. 聖霊の人格

聖霊のことを、単なる物体と思わないでください。聖霊は、すべての信者に宿っており、人格を持っています。私たちは、時々、見える人しか本当の人ではないと思ってしまいます。しかし実際は、私たちは、目に見える肉なる体だけでなく、目に見えない個性や人格も持っているのです。肉なる体は、地上で生きている間、神様が与えてくださった便宜的なものに過ぎません。人が死ぬ時、人の肉体は墓に埋葬されますが、魂はそこから離れて行きます。魂は、聖霊と同じく、決して目に見えるものではありません。

A. 人間に対する聖霊の反応を見れば、人格があることがわかります。

1. 悲しまれることがあります。「神様の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、あがないの日に対して保証されているのです。」エ

ペソ4:30

2. 試されることがあります。「ペトロは言った。二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。」使徒5:9
3. 逆らわれることがあります。「かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。」使徒7:51
4. 冒瀆（ぼうとく）されることがあります。「聖霊を冒瀆（ぼうとく）する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」マルコ3:29
5. うそをつかれることがあります。「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。」使徒5:3

B. 聖霊は、聖書の何カ所かで神様と呼ばれています。次の聖書箇所でもわかるように、聖霊は神様の性質を持つておられます。

1. 全能 ルカ1:35

キリストが誕生されたとき、マリヤとイエス様の保護者でした。私たちの保護者でもあります。

2. 全知 1コリント2:10 私たちの人生のすべてのことをごぞんじです。

3. 遍在 詩篇139:7-17

私たちの人生の中で、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」方です。いつも共にいてくださいます。

4. 永遠の霊 ヘブル9:14

私たちが、新しく生まれ変わって天国にいたるまで、生きる神様に仕える私たちを助けてくださいます。

C. 聖霊が、神様としての働きをする象徴や実例が、聖書の中にいくつか書かれています。

1. 鳩 - ヨハネ1:32

聖霊がイエス様に仕えるときの鳩は、愛と悲しみの象徴です。

2. 水 - イザヤ44:3 ; ヨハネ7:38-39

人が救われたのち、霊的な渇きをいやすのは、聖霊以外にありません。

3. 油 - 1サムエル16:13

祭司が神様のみ声を聞くように、祭司の耳に油を注がれました。次に、祭司が神様のために行動できるように、祭司の親指に油注がれました。私たちの人生にも、このような聖霊の働きがあります。

4. 風 - ヨハネ3:6-8

聖霊は、音もなく静かな風のように、救いにおいても私たちの日常生活においても、働いてくださいます。

5. 火 - 使徒2:3-4

火は、清めと試みと裁きの象徴であり、聖霊は私たちの人生に働きかけます。

6. 衣服（覆い） - 士師6:34 (Amplified

Versionという英訳では着るとのことばが使われています。) 衣服は、守ることを意味します。聖霊は、私たちを守ります。

II. 聖霊の目的

聖霊は、聖書の中であらゆる分野にかかわられます。以下は、聖霊がかかわ

る事例です。

- A. 語られます。「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』」使徒**13:2**
- B. とりなしてください。「同ように、“霊”も弱いわたしたちを助けてください。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、ことばに表せないうめきを持つて執り成してくださるからです。」ローマ**8:26**
- C. 証しされた。「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。」ヨハネ**15:26**
- D. 監督してください。「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神様が御子の血によって御自分のものとなさった神様の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。」使徒**20:28**
- E. 導いてください。「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる…」ヨハネ**16:13**
- F. 教えてください。「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」ヨハネ**14:26**
- G. 天地を創造されました。「初めに、神様は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神様の霊が水の面を動いていた。」創世**1:1-2**
- H. 再び生まれさせて、救ってください。「イエス様は答えて言われた。『はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神様の国を見ることはできない。』」
「イエス様はお答えになった。『はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神様の国に入ることはできない。』肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。…霊から生まれた者もみなそのとおりである。」ヨハネ**3:3 ; 5-8**
- I. イエス様を、死人の中からよみがえらせました。「もし、イエス様を死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださいでしょう。」ローマ**8:11**
- J. 救いを全うしてください。「あなたがたの中にはそのような者もいました。しかし、主イエス様・キリストの名とわたしたちの神様の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています。」1コリント**6:11**
- K. 私たちの救いの証印となってください。「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理のことば、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。」エペソ**1:13**
- L. 信者を導ってください。「神様の霊によって導かれる者はみな、神様の子なのです。」ローマ**8:14 ; ガラテヤ5:18**

クリスチャンとしての人生を歩むとき、私たちは聖霊が毎日助けてくださることを意識すればよいのです。聖書は、私たちが聖霊に満たされ、導かれていると教えています。日常の中で、私たちが罪の中にとどまっているなら、聖霊は働けません。心の罪や行いの罪によって、聖霊を遠ざけそうになるときは、

神様との交わりを失わないように、**1ヨハネ1:9**をさっそく実行しなければなりません。「自分の罪を公に言い表すなら、神様は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。」このようにして、私たちは、神様との交わりを持ち続けることができます。この世でクリスチャンが直面する最も危険なことは、破産でも、病気でも、孤独でも、侮辱でも、迫害でも、その他どんなものでもありません。一番危ないことは、自分の人生の中に罪を入らせることです。私たちと神様との交わりを断絶し、聖霊を遠ざけ、私たちの歩む道を滅びの道にいたらせてしまうことが罪なのです。私たちが気をつけなければならないことが、**ガラテヤ5:19-**

21に書いてあります。サタンが、私たちの魂の敵だということを悟らなければなりません。これは、私たちの毎日の戦いです。**エペソ6:11-18**

1ヨハネ1:7に書いてあるように「神様が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに〔神様とあなたとの〕交わりを持ち、御子イエス様の血によってあらゆる罪から清められます。」このみことばによって、勝利を得ます。罪を犯したとき、常に神様に告白すれば、父なる神様との交わりを持ち続けることができます。魂の敵から自分を守る唯一の方法は、すぐに罪を告白することです。**1ヨハネ1**章を暗記するほど、何回も読んでください。それが、正しいクリスチャン生活を守る秘訣です。

III. 聖霊の働き

どんなクリスチャンも、二つの心を持って生きています。限られた状況では、どちらかの心を選びます。たとえクリスチャンであっても、思いのままにどちらの心も選ぶこともできるのです。二つの心とは、肉にある心と、御霊に守られた心です。それを実とするなら、どちらの実を摘み取るかは、だれを自分の人生の導き手にするかによって決まります。「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」**ガラテヤ5:16-**

17 あなたは、毎日この世で生きて実を結んでいます。どちらの実でしょうか。この世は、肉の欲望を満足させるように誘惑します。広告、マスメディア、雑誌など多くのものが誘惑します。サタンは、この世の神です。**1ヨハネ5:19** この肉の働きは、**ガラテヤ5:19-21**

にあります。クリスチャンでない人は、欲望のままに肉の実を選びます。人間的に見ると、よいと思われる行いとか、人がほめる宗教的、かつ社会的な行いをするかも知れませんが、神様の目から見れば、それらに永遠に残るような価値はありません。

聖霊の働きは、御霊にあつて、あなたの人生に心の実を結ばせることです。生まれ変わったクリスチャンでなければ、よい実を結ぶことはできません。御霊の「実」ということばは、聖書の中で使われているときに、単数形だということに注目してください。自分かつてに、一つの実だけを選べません。聖霊の実ですから、実がすべて実なのか、実を全く結ばないかは、あなたと神様との霊的關係によって決まるのです。罪が入り込むと、御霊の実は肉の実に変わってしまいます。すべてのクリスチャンの願いは、もちろん生活の中でよい実を結ぶことです。私たちが聖霊の正しい導きに従っていけば、聖霊が私たちの人生の中で働いてくださり、御霊の実を結ばせてくださいます。聖霊がすべての人の救い主でなければ、聖霊は神様ではありえません。**ガラテヤ5:22-24**

私たちは、御霊の実を結ぶために、特別な努力はしません。すでにキリストにあつて獲得しているからです。それでも、日々の生活の中で、よい実を結ぶように戦わなければなりません。私たちの勝利はこの聖句にあります。「キ

リスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。」ガラテヤ**5:24**

私たちの勝利は、自分の努力によるのではなく、キリストによるのだということに気づかなければなりません。肉なる思いを十字架につけたのは、私たちの行ないによるのではなく、私たちの内に宿り、私たちもその内に生きているキリストによるのです。「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。」ガラテヤ**2:20**

聖霊の導きに従うとき、日々勝利が得られます。たとえ、あなたが聖霊を悲しませることがあっても、「贖い（あがない）の日に対して保証されているのです。」エペソ**4:30**から、聖霊は、あなたから離れることは決してありません。私たちが天国の岸にたどり着くまで、聖霊はいつもあなたの内に宿ってください。

IV. 聖霊の備え

あなたはクリスチャンとして、「私には何ができるだろうか。」と、自分に問いかけたことがありますか。もし私があなたに新しい車をプレゼントしたなら、私はあなたにどんなことを期待するのでしょうか。それをただ眺めたり、訪ねて来た人が見たり、あれこれと話したり、ほかの人たちにも教えたり、写真も取れるように陳列室に入れておくことでしょうか。それとも、その車に乗って運転することでしょうか。もちろん車の目的は、運転することです。仕事に行ったり、友だちを乗せたりして運転するかもしれません。ただ田舎のドライブを楽しむだけかも知れません。神様が、あなたの内に宿ってくださる聖霊と御霊の賜物と永遠の命という贈り物を与えてくださったのは、それらを神様のために使ってほしいからなのです。「兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。...賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に“霊”の働きが現われるのは、全体の益となるためです。」1コリント**12:1,4-7**

以下の聖書箇所、聖霊が信者に与える賜物が書かれています。主に仕えるために、それぞれの信者に、少なくとも一つの賜物が与えられています。

ローマ**12:4-8**

主は、私たちに与えた賜物を、どのように用いることを期待しておられるのでしょうか。世の中を見たり、聖書を読んだりして、他人の賜物をうらやむべきではありません。あなたに与えられた聖霊の賜物は、神様の特別な子供として、あなただけに与えられたものだとして理解してください。「そこで神様は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。」1コリント**12:18**

「私の賜物は何だろう。」と思うかも知れませんが、それはだれにもわかりません。神様に聞いてください。自分の賜物を見つけて、それを大いに用いてください。

特殊な賜物は、現代のクリスチャンに与えられていません。使徒言行録は、教会が始まる移行期の記録だということを、思い出してください。使徒言行録は移行期の書ですから、新約聖書の残りの部分の教えを抜きにして、使徒言行録のみで教義を建て上げることはできません。ペンテコステのとき、信者は新約聖書を持っていなかったため、神様はご自分の力と存在を示すために、奇跡や啓示や異言をお使いになりました。これは、人間をあがなうために来られた救い主の出現を、早く知らせるためでした。それはペンテコステのときだけの奇跡であり、再び起こることはなかったのです。十字架や肉体的な復活や昇天

が一度きりであるように、ペンテコステも一度しかありえません。ペンテコステの日に、世界中から来た当時の人々に対して、使徒たちは彼らの母国語で福音を語りました。そのために、あおれを聞いた人々は、帰ってから、死人の中から救い主がよみがえられたことを同国人に伝えることができたのです。

使徒2:4, 22-24

現代では、異言を話す力が働くことは、もはやありません。聖書は、世界のあらゆることばに翻訳されています。私たちのやるべきことは、ただ自分のことばを用いて、福音を宣べ伝えるという神様のご命令を実行することです。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」マルコ**16:15**

今は、文字で書かれた新約聖書で、神様の全啓示を知ることができるので、神様の教えを特別なことばで伝える賜物を必要とはしません。同じ理由から、預言を伝える賜物も、もはや必要ではないのです。こういう特別な賜物は、クリスチャンが、今のような新約聖書を持たなかった特別な時代に必要なものでした。神様は、新約聖書が完成されるまでは、旧約聖書を通したり、ご自分の民に直接語ってくださっていたのです。**1コリント13:10**が新約聖書を指して述べているように、「完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。

」
ヤコブ**1:25**
がいう「自由をもたらす完全な律法を」とは、新約聖書のことなのです。今は、新約聖書という文字に書かれた神様のみことばがあるので、異言や預言のような特別の賜物は必要ないのです。そういうわけで、神様のことばに啓示や預言などを付け加えることは、神様の裁きを招きます。黙示録**22:18-**

19に書いてある通りです。「この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、わたしは証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある命の木と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。」

V. 聖霊の証印

聖霊ご自身が証印です。

A. 所有者としての証印です。**2テモテ2:19**

B. 身分証明の証印です。**エペソ1:13-14**

C. 保証の証印です。**エペソ1:13-14**

D. 署名され、完成した証書の証印です。この証印は、法律的にも有効です。**エレミヤ32:10**

E. 義と認められた証印です。**ローマ4:11**

F. しっかりと刻印された証印です。この刻印は、いつも確実に刻印されています。聖霊で刻印されるとき、私たちの心に神様の刻印が刻まれます。**2コリント1:22** これは「保証」の証印です。保証金とは手付金のことですが、残りのすべては後で支払われます。内に宿る聖霊とは、ちょうど神様の保証金のようなものです。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、購いの日に対して保証されているのです。」**エペソ4:30**

聖霊は、天国で再会する日まで、永久にあなたから離れません。

VI. 聖霊のバプテスマ

「バプテスマ」という言葉は「浸す、入れる、又は一致する」という意味が

あります。聖霊のバプテスマというのは、救われる時に、聖霊が私たちがキリストのからだに導いてくださることです。「キリストのからだ」とは「教会」と同じ意味で、すべての生まれ変わった信者が集うところです。「つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらったのです。」1コリント12:13　これがペンテコステの約束で、教会の始まりでした。

聖霊のバプテスマとは、財力や経験に関係なく、聖霊ご自身が、人をキリストに導き入れることです。使徒1:5「ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられるからである。」このペンテコステとは、まもなく来るはずの教会の始まりのことです。ペンテコステ以前は聖霊が人に下ってきていましたが、ペンテコステ以後の聖霊は、いつも人の内におられるようになりました。救われたすべての人の内に、在住しているのです。聖書の中で「聖霊のバプテスマ」という言葉が使われる時は、必ず単数ではなく複数として用いられています。「聖霊と火のバプテスマ」というのは、救いと裁きを表す対照的な描写です。マタイ3:11-12；ルカ3:16-17

ある人は、「聖霊のバプテスマ」を受けたと言って異言を語ります。また、ある人は病気を治したり、奇跡を行ったり、悪霊を追い出したりする力を得たと言いますが、そういう人は、にせ預言者やにせ教師です。2ペテロ2章を読んでみてください。その人達は、聖書に基づいて自分の経験を受けとめるのではなく、聖書を自分の経験によって都合よく解釈してしまいます。悪魔は、神様には関係のないいつわりの奇跡を行います。真理の御霊もありますが、人を惑わす霊もあるのです。1ヨハネ4:1-6

現代のクリスチャンにとって聖霊の賜物を生かす最大の鍵は、「最高の動機」にあります。1コリント13:2「たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰をもっていようとも、愛がなければ、無に等しい。」クリスチャンが与えられた賜物を生かす動機は、愛でなければなりません。私達はいつでも、どこでも、どんな働きや証をするにしても、主が導いてくださるように、主イエス・キリストにすべてを委ねなければなりません。聖霊の働きや人格については、まだたくさん述べたいことがあります。キリストにあって成長していくに従って、私たちの人生の中で聖霊がともにいてくださること、いかに働いてくださっているかがよく分かるようになるでしょう。

人間 第5章 人間

人間に関する真理を知りたいなら、聖書に戻らなければなりません。「真理とは、神様の言われたことです。」聖書では、人間の創造、性質、およびほかの被造物との関係について教えています。人間は創造の中心でした。地球の全てが、人間の支配下にあります。創世記1:26
しかし、本当に人間を知るためには、人間の考えではなく、神様の見方に立たなければなりません。

I. 人間の起原

人間が人の起原に関して興味を持つのは、ごく自然なことです。人はいつもそのことに興味を持ち続けています。いろいろな時代に、さまざまな学説が、多くの哲学者によって出されました。もっとも新しい学説は、進化論です。進化論は、**下等動物が人間の祖先だと主張します。**昔の人間と現代の人間が違うという明らかな証拠は、何もありません。人間の血液が、世界中でたった一種類しかないということは、人間が進化によってできたのではないことを証明します。使徒**17:26**

動物の血液は、人間の命を生かすことができません。人間の血液を、動物の血液と混ぜ合わせることもできません。神様は、魚、鳥、獣、そして人間を、それぞれの種類にしたがって創造されたのです。創世記**1:24-25**

人間は、神様にかたどって造られたので、ほかの動物とは明らかに違います。「神は言われた。我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」創世記**1:26-27**

神様は、最初の人間を地のちりから造られました。創世記**2:7**
しかし、歴史をふり返ると、次に挙げる方法でも、人間を造られたのです。**(A)** 男と女による受胎によって。**(B)** エバのように母体を通してではなく。**(C)** アダムのように男と女による受胎によらないで。**(D)** キリストのように処女降誕で。これは、神様が命に対して絶対的な権威を持っている、もう一つの証拠です。

神様は、被造物である人間について言われます。「彼らは皆、わたしの名によって呼ばれる者。わたしの栄光のために創造し形づくり、完成した者。」イザヤ**43:7**

そこで問題なのは、「人間が存在する最終目的は何か。」と言うことです。その答は明白です。「神様に栄光を帰するためです。」

II. 人間の性質

人の死に臨んだ人は、人間には肉体と霊と魂のあることがはっきりと分かります。たった今まで息をして、生きていた人が、次の瞬間、息を引き取ります。それでも、その体はまだそこにあります。しかし、生命はなくなってしまう、死体だけが残っています。

聖書は、人間は三つのものから成っていると教えます。つまり、体と魂と霊の三つです。

1テサロニケ5:23 霊と魂は、肉なる体と違って区別しにくいのですが、聖書は違いがあると言います。植物は、魂も霊もない体です。動物は、体と魂がありますが、霊はありません。人間には、体と魂と霊と三つが備わっているのです。魂があるかどうかによって、生きているものと死んだものとの区別がつけます。霊があるかどうかによって、人間と動物の区別がつけます。人間は霊を持っているので、神様と交わりができるのです。

被造物の中で、人間だけが祈ります。祈りは、普遍的な行為です。未開の人から先進国の人々にいたるまで、人間は祈ります。なぜでしょうか。バナナをもらった猿が、神様に感謝するのを見たことがありますか。また、人間だけが良心をもつ被造物です。ほかの猿のココナッツを盗んだり、ほかの猿と性交したからといって、罪悪感を持つ猿など見たことはありません。歴史的な書物の中には、悪を行い、自責の念にかられた人の話がたくさん出てきます。ローマ**1:18-**

32 動物は、本能によって行動します。人間だけが、理性によって行動するのです。

罪を犯した人がクリスチャンになるとき、聖霊が心に宿ります。墮落したサタンによってアダムが罪を犯し、人間の心の中に、その罪の性質が受け継がれたのです。イエス様にある信仰を持ち、個人的な救い主としてイエス様を受け入れるなら、イエス様が聖霊を通して私達の人生を共に歩んでくださいます。その時点で、私達には「あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」という新しい性質が備わるのです。コロサイ**1:27**

魂は、感情と情熱の基となるものです。霊という言葉には、物事を理解する能力と理性が含まれています。人間は神様に対してなすべき責任があり、その最大の義務は、神様が人間に望んでおられることが何であるかを知り、それを行うことです。クリスチャンの心の中には、肉と霊という二つの相反する思いがあり、一生葛藤し続けなければなりません。（このことは、「救い」の項でさらに詳しく書かれて「ます。」）

III. 人間の自由意志

宇宙には、神様が造られたほかの被造物もいます。それは、天使あるいは霊というものです。彼らには、人間のような体や魂はありません。人よりも力があります。人間と同じく彼らも、神様に仕えるために造られましたが、自由意志を持っています。その中のある霊たちは、不従順の罪に陥ったのです。イザヤ**14:12-15**

神様は、ご自分のみ心を機械的に行なうように、たくさんのロボットを造ることはなさいません。自由意志を持って神様に仕え、神様を愛する人を造る選択をされたのです。なぜそういうふうに望まれたのか、私達にはよく分かりませんが、歴史を通して見ると、そうされたことが明らかです。人は自らの意思で選択でき、神様は、その結果を人にゆだねたのです。

IV. 人の罪

人間をお造りになったとき、神様の御心を行うか行わないかを、人間の自由に任せました。当然神様は、まちがった道を選ぶ人がいることをご存知だったはずですが、結果はそうになりました。「ルーシファ」と呼ばれ、悪魔として知られた悪名高い天使は、神様に反対する立場を取りました。最初の罪は、地上ではなく、天で犯されたのです。この天使は、たちまち天から追い出されました。多くの天使が悪魔に加担したために、一緒に追い出されたのです。その時から、悪魔は、あらゆる方法で神様のご計画を邪魔しようとし、人が自由意志を持つ者として創造された時、悪魔は、人が神様に従わないように誘惑する計画をすぐに立てました。神様は人に警告をしましたが、悪魔はあまりにも狡猾だったので、人を罪に引き込んだのです。この有名な話は、創世記**3章**に書いてあります。

神様は宇宙の善なる支配者ですから、ご自分の命令にわざと背く人を、み前におらせることはできません。だから、悪魔が神様のみ心にそむいたとき、天から追い出されたのです。人間も同様に追い出されました。そのために、アダムは神様の前から追い出されたのです。創世記**3:23-24**

罪が人類に入り込んだので、アダムの罪の性質は、すべての人に引き継がれています。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって

死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」 ローマ5:12
私達は皆、罪を犯しやすい性質をもって生まれています。だから回りの誘惑にそそのかされ、負けてしまい、聖なる神様に対してひどい罪を犯してしまうのです。

V. 人間の将来

人が神様の手によって創造され、不名誉な墮落をし、その結果、神様から断絶されたことは、聖書で述べられています。同様に、男も女も大人も子供も全ての人間が、いつかは自分の裁き主である神様のみ前に立つということが、はっきりと知らされています。「それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。」 ローマ14:12

死というのは、自然に起こることです。全ての人間が避けることのできない終わりのときだということは、だれにでも分かります。しかし、聖書はこうも言います。「また、人間にはただ死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっているように、」

ヘブル9:27 神様は人を創造され、み言葉を通してご自分のみ心を啓示してくださいました。神様は、一人一人にその行いの責任を完全に持たせます。今の人生は、次の人生のための準備なのです。人間は、動物のように死にません。人間の霊は、自分の創造主と裁き主であられる神様のもとへ行かなければなりません。

罪 第6章 罪

I. 罪とは何ですか。

聖書を読み進むと、罪とその原因と解決がずいぶん強調されていることに、誰でも気づくでしょう。罪と言われれば、すぐ法律を破ることや殺人犯に関連したことなどを思い浮かべます。しかし、聖書でいう「罪」とは、神様が完全であられることに対して、欠けていることを意味します。

ローマ3:23に「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています。」と書いてあります。「神様の栄光」とは、神様が100満点の完全なお方であると考えれば、罪というのは合格点に満たないということです。全ての人は罪人です。聖書の中で、罪は次のようにも表現されています。

- A. 神様の立法を破ること。 ローマ5:13
- B. 神様に対する反逆、または不法。 1ヨハネ3:4〔口語訳〕
- C. 道徳的な不純。 詩篇32:5
- D. 悪い行いと同等くらい、悪い思いも罪です。 マタイ5:28

II. 罪の起源

記録されている一番最初の罪は、天で行われました。ルーシファと言う天使が、神様と同等の地位を求めたのです。

イザヤ14:12-14 その高慢の罪のために天から追い出され、聖書のほかの箇

所では悪魔、またはサタンと呼ばれるようになりました。

地上での最初の罪は、創世記3章に描写されています。エデンの園で行われました。神様は、善悪の知識の木の実を食べてはいけないと、アダムとエバに命じられたのです。彼らは、神様にそむいて禁じられた木の実を食べ、罪を犯した人となりました。

III. 罪の結果

A. 人類の祖先であるアダムとエバは、知識の木の実を食べて罪を犯し、自分たちが裸であることに気がついて、神様から隠れようとなりました。

創世記

3:7-8

B. 罪の罰は、死です。アダムは、罪を犯して霊的に死にました。そのために、神様から離れ、神様のみ許から追放されました。そして、肉体的にも死ぬようになりました。もちろんすぐには死にませんでした。アダムは死ぬように定められたのです。

ローマ5:12

C. アダムの罪の性質は、全人類にまで及びました。罪のある親の子供として生まれたのですから、人は皆生まれながらにして、選択の余地もなく、行動においてもみな罪人なのです。アダムの長男カインも、人を殺しました。このようにして、全人類に罪の影響が及ぶようになったのです。人は皆罪人として生まれてくるので、霊的に死んでいるし、やがて肉体的にも死ぬように定まっています。この点については、ローマ5:12-18をよく読んでください。

D. 人間の罪のために、全ての被造物が、神様に呪われたものとなりました。アダムの長男は人殺しになりました。茨とアザミはこの呪いのしるしと言えるでしょう。

創世記3:14-19に、ほかのしるしも述べられています。現代人は、人間の墮落を、ただ人間的な失敗や間違いの結果だと説明します。ある心理学者は、知識や技術に関する進歩を指して、人間はだんだんよくなって来ていると説得します。けれども、墓地、刑務所、病院、また葬儀屋がある限り、罪がなくなっているというわけではありません。どんな名目であれ、涙、病気、悲しみ、痛み、および死は、罪による結果の明らかなしるしなのです。人間はなぜ罪を犯すのでしょうか。ヨハネ8:44を読んでください。罪は天で始まり、地獄で終わります。

黙示録20:10

IV. 罪の刑罰

「罪が支払う報酬は死です。」

ローマ6:23

神様は、罪の刑罰が死であることを定められました。人間が、神様のみ前で認められるように、自分を完全にする方法はありません。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、」

ローマ3:23

これが、霊的な死と肉体的な死を意味することは、もう学びました。この刑罰は償われなければなりません。神様は、罪のために私達を罰するか、あるいは私達を清めてその罪を赦す、いずれかの方法を取るのです。

人間が罪の中で生きている限り、霊的には死んでいるし、肉体的な死にも直面しています。死ぬ時にまだ罪の中にいるなら、永遠の死を受けるのです。それは、永遠に神様から追放され、自分の罪のために火の池の中で苦しむという

意味です。これは、黙示録**20:14**に語られている第二の死です。

V. 罪の解決

神様は、人間が自分の罪のために、永遠に苦しまないように、解決方法を備えてくださいました。人間の罪を解放するために、御自分の御子を世に送ってくださったのです。主イエス・キリストは、処女マリヤから生まれました。処女から生まれたのは、罪の性質を持たないで生まれるために、絶対必要でした。これによって、アダムの子の性質を受け継がなかったのです。全ての人間の中で、イエス様だけが罪のない人間でした。自らの意思で、十字架上で人の罪の罰を受け、聖なる神様のすべての要求を満たしてくださったのです。イエス様によって罪の罰が償われました。自分が罪人だと告白して、主イエス・キリストを自分の救い主として受け入れる人に、神様は永遠の命を授けてくださるのです。 **2コリント5:21** このことは、「救い」の項で、さらに詳しく説明されます。)

人がキリストを信じたら、罪の魔力と罰から救われます。これは、人がもはや罪を犯さないという意味ではありません。しかし、人の過去と現在と将来の罪が全部赦されて、そのために裁かれないという意味なのです。キリストが死なれたのは、まだあなたが生まれる前であり、しかもあなたの罪のためだったことを思い出してください。キリストにあるクリスチャンは、罪とサタンの力と快樂のために生きるのではなく、神様のために生きる力を勝ち得ているのです。

イエス・キリストが十字架の上で死んでくださったのは、このためなのです。
。「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。」 **1ペトロ (ペテロ) 2:24**

救い 第7章 救い

救いの必要は、聖書の中で明確に教えられています。神様はこの世を霊的に二つの家族と見ておられるのです。一つの家族は、悪魔の子供から成り立っています。「あなたたちは悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には心理がないからだ。」

ヨハネ8:44 もう一つの家族は、神様の子供から成っています。「しかし、言(ことば)は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神様の子となる資格を与えた。」 **ヨハネ1:12**

あなたは今、どちらかの家族に属しています。もしあなたが今日死ぬとしたら、属している家族によって、自分の永遠の行く先が決まるのです。今あなたは、神様の家族に属していますか。それとも悪魔の家族に属していますか。これは、あなたが答えるべき質問なのです。

神様がご自分のみ子イエス・キリストをこの世に遣わしてくださったのは、

イエス様が世の罪のために死んで、サタンに打ち勝ち、それによって私達が「再び生まれる」道を備えるためでした。これが重要です。「人は、新たに生まれなければ、神の国をみることはできない。」

ヨハネ**3:3** この新しい霊的な誕生は、私達を神様の家族の一員にしてくれます。救いとはこういうことなのです。

次の**11**項目は、救いと新生ではありません。

1. 自然発生的な世代や子孫——「血筋」によるものではありません。人がクリスチャンの家庭に生まれ、クリスチャンの親に育てられても、それによってクリスチャンになるわけではありません。

2. 自己決定——「肉体的な意思」によるものではありません。子供が自分の生まれることを選べないと同じように、誰も、自分の努力によって新しく生まれることはできません。

3. 人間の仲介——「人の意思」によるのではなく、神様の意思によるのです。祭司、預言者、説教者、牧師やまたほかの霊的な指導者と思われる人であっても、教会の中の地位がどれほど高くても、誰も新しい誕生や霊的な命を人に授けることはできません。どんな宗教の儀式、犠牲、苦行、懺悔、および繰り返しの祈祷でも、新しい命を誕生させることはできません。

4. 肉体的な変化ではありません。キリストが、このことについてのニコデモの誤解を正してくださり、それは霊的変化であることを示されました。

ヨハネ**3:6**

5. 社会的、地理的な変化ではありません。再び生まれた人が、突然天国へ移されるわけではありません。地上に住んでいる間、自分の主である救い主を喜ぶことです。 **1コリント7:20-24** ; **コロサイ3:22-24**

6. 知的に理解することではありません。人は生まれ変わらなくても、宗教的な教育を受けられるし、牧師になるために教会の按手を受けられるし、実際に牧師になることができます。そういう人は大勢います。頭で新しい誕生の必要を分かっても、行動を起こさなければ、わかったことにはなりません。 **2ペトロ (ペテロ) 2:1, 20-21**

7. 成長していく過程で得られるものではありません。人の内にある霊的な命の種のようなものが、ゆっくりと成長するわけではないのです。

エフェソ (エペソ) **2:1-**

2 罪人は、霊的に死んでいると描写されています。少しずつ変化するものではありません。誕生によって、命は急に発生するのです。誕生しなければ、命は成長することができません。

8. 改革や自己改善によって、外面的な悪習をやめることではありません。人の礼儀や習慣を変えることでもありません。 **エフェソ (エペソ) 2:8-**

9 それは、新しい命を与えることなのです。「わたしは彼らに永遠の命を与える。」 **ヨハネ10:28**

9. 水のバプテスマによるものではありません。海水全部を使っても、水には、人を救ったり、清めたりする力はありません。人間が何と言おうと、水によって人は救われません。バプテスマというのは、イエス・キリストの死、埋葬、そして復活を表す儀式だけであって、それ以上には何の意味もありません。私達がバプテスマを受けるのは、神様が私達の人生の中でしてくださったことを、公に証することです。

1ペトロ (ペテロ) 3:21 私達が救われるのは水によるのではなく、十字架で流してくださったイエス・キリストの血によるのです。

10. 堅信礼ではありません。ある教会では、ふつう**12, 13**歳の子供に、特

別な儀式を授けて、それを受ける子供を救われたように認めます。ある場合は、聖霊を受けることを意味する油の注ぎをもって行われます。これはいつもの教理です。人間の行いによって聖霊を受けるのではなく、イエス・キリストを自分の個人的な救い主として受け入れることによって、聖霊を受けるのです。
ヨハネ3:6

11. 宗教的な信仰や教会員資格ではありません。宗教的で熱心な信念を持ち、バプテスマと堅信礼を受け、教会員になり、聖餐式を受け、日曜学校で教え、教会の指導者になり、牧師や神様父になり、奇跡のような癒しや預言をしても、生まれ変わらないこともありえます。使徒 8:22-23
新生の必要性は、当時、一番宗教的に熱心で、道徳的に優れた人の一人に求められたのです。ヨハネ3:1-16

新しく生まれることは霊的な変化であり、ヨハネ3:8
神様だけにできることなのです。ヨハネ1:13

I. 定義

救いという語は、簡単に言うと助けるという意味です。普通は、迫りくる危険から救う行為を表現するときに使います。おぼれたり、燃え盛る建物や、沈んでいく船から、人を助けるというように使います。救う行為には、はっきりと3つの要素があります。(1) 助けられた人は、死の危険にさらされていた。(2) 誰かがそれを見て、救助に行った。(3) 救助隊は、無事にその人を危険から助け、彼を「救った」。聖書には、「救う」「救った」「救い主」「救い」といった言葉がたくさん出てきて、精神的な「救い」という意味では、まったく同じ意味に使われています。

II. 必要性

だれもが直面する2つの事実のために、神様の救いが必要です。

A. 人は罪人であるという事実 ローマ3:23

全ての人の精神的状態については、今までの学びの中で、すでに述べてきました。すべての人は、生まれながらにして罪の子供です。人は誰でも、罪の性質を帯びてこの世に生まれるため、人は生まれながらにして罪人だと指摘してきました。この罪の性質が、遅かれ早かれ、罪の思い、罪のことば、罪の行ない、しいては、神様に敵対する態度となって現われるのです。聖書は、これらを多くの事例で明らかにしています。 ローマ5:12, 18, 19; 6:16; 8:5-8; 創世記6:5; エペソ2:1-3; 2 コリント4:3-4; イザヤ53:6; エレミヤ17:9; マルコ7:20-23; ローマ1:21-32;
3:19-23 これらのみ言葉から明らかなことは、人間は、

1. 赦しの必要な罪人です。
2. 見つけられる必要のある迷い子です。
3. 神様との新しい関係に移らなければならない罪の子供です。
4. 神様だけが赦せる有罪者です。
5. 神様だけが与えることのできる命を必要とする精神的な死人です。
6. 神様のことばから来る光を必要とする盲目です。

7. サタンと死から解放される必要のある奴隷です。このように、人は、自分で自分を救うことがまったくできません。

B. 神様は義であるという事実

神様は聖なる方なので、罪を罰さなければなりません。神様は、「罰すべきものを決して赦しません。」

出エジプト記**34:6-7** 神様は罪を憎み、罪のままで死んだすべての人に判決を下します。神様の前から永遠に追放するのです。 ヨハネ**8:21-24**;

マルコ**9:43-48**; ルカ**16:22-31**; ユダ**11-13**; 黙示録**20:11-15**

人は罪人であり、神様は義なる方であるということが、はっきりとした結論です。また、罪人はその罪の罰から解放されるか、救われる必要があります。罪人は「救われるためには、何をすればいいのですか。」と叫ぶでしょう。答えは、「主なるイエス・キリストを信じれば、救われます。」 使徒**16:30-31**
自分を救うことができる人は、だれもいません。

III. 準備

福音とは、神様が驚くばかりの恵みを持って、愛するみ子による救いを、大いなる祝福を持って準備されたというよい知らせのことです。2つのことが、はっきりと教えられています。

A. キリストは、罪人の救い主として来られました。

「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

ルカ**19:10** 神の子は、父なる神や聖霊と同じであり、かつ永遠であり、救いを与えるために人間になりました。 ヨハネ**3:16-17**; マルコ**10:45**;
マタイ**9:12-13**; ヨハネ**10:11**; 15-18

B. この救いは、神様の完全なみこころに従い、キリストの死とよみがえりを通して与えられました。

キリストは、私たちのすべてのとがと罪の負債を負い、その身に私たちの罪を負い、すべての罪人のために身代わりとして、自分から進んで十字架で死なれたのです。罪に対する神様のすべての裁きがキリストにくだされ、罪人を罰するという神様の正義が、キリストの死によって完全に満たされたのです。キリストを死人の中からよみがえらせ、ご自分の右のみ座に座らせたことによって、神様が、キリストの犠牲を完全に受け入れたことがわかります。以下を読んでください。 1コリント**15:1-4**; 2コリント**5:21**;

1ペトロ (ペテロ) **2:24**; イザヤ**53:5**; ローマ**5:6-9**; 使徒**4:10-12**; **5:31**;
17:31

IV. 条件

キリストが、ご自分の犠牲によって罪人の救いに必要なすべてのことを成し遂げてくださったのですから、この救いを得るために、罪人は何をすればいいのでしょうか。

A. 悔い改めなければなりません。

悔い改めとは、心を素直に入れ替えて、その結果、罪や自己や救い主や救いに対する態度を変えることです。行ないが改まることによって、そのことがわかります。以下を読んでください。 ルカ**13:3**; 使徒**17:31**;
20:21 罪人が悔い改めれば、救いを真剣に求めます。誇らないで、謙遜になります。自己満足しないで、助けがなくては地獄に行くほかはない状態を、素直に告白するようになりますのです。

B. キリストとその十字架について、神様が証しする福音を信じなければなりません。 1ヨハネ**5:9-10**

迷子で罪ある一人一人が、キリストが自分のために死んでくださったこと、つまり、キリストが自分の代わりに罪を負ってくださり、死ぬことによって、救いに必要なすべてのことを成し遂げてくださったということを、信じなければならぬのです。ローマ**4:5**

C. 主イエス・キリストを自分の個人的な救い主として自分の明確な意志で受け入れ、その後、人生の最高の主人にしなければなりません。 ヨハネ**1:12**; ローマ**10:9-10**; ヨハネ**3:16**; **5:24**; **6:47**; エフェソ (エペソ) **1:13**

これは、きわめて重大な行為です。あなたは心から言います。「主イエス・キリスト様、私は自分が有罪で、迷子の罪人であることを認めます。あなたが、私の罪をカルバリの十字架上で負われ、私の代わりに死なれたことを信じます。今、私の心に入り、私を救ってください。十字架上で成し遂げられたわざを信頼しますから、私の人生の主人になっていただきたいのです。」これが、「主イエス・キリストを信じる」という意味なのです。

使徒**16:31** もし、あなたがこの告白をしたことがなければ、今すぐ告白して、あなたを救ってくださるよう、イエス様に頼んでください。

V. 確証

どうすれば、自分は確かに救われたと知ることができるでしょうか。迷わずお答えします。それは神様のことばによるのです。イエス様を信じた魂は赦され、救われ、永遠の命を持ち、いつまでも守られると、神様はきわめてはっきり宣言しています。以下を読んでください。 使徒**13:38**; 1ヨハネ**2:12**;
エフェソ (エペソ) **2:8**; 1コリント**6:11**; 1ヨハネ**5:13**; ローマ**5:1**; **8:1**;
ヨハネ**10:27-30**

ほかの証拠もあります。新しい永遠の平和、聖書を知りたいと思う願い、祈ったり罪の生活から離れたと思う願いです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」 コリント**5:17**

VI. 範囲

救いは、過去、現在、未来の3つの面から成り立っています。

A. 過去

— 罪の違反やその結果からの救い

私たちの罪によるすべての罰を、キリストが受けてくださったので、クリスチャンは罪の罰から解放されています。 ヨハネ5:24; ローマ8:1

B. 現在

— 罪の力や支配からの救い

聖霊が心に住んでくださり、神の性質を与えてくださったことにより、クリスチャンは、人生を支配していた罪から解放されたことを喜ぶことができます。 1コリント6:19; 2ペトロ (ペテロ) 1:3-4; ローマ6:1-

14 これは、クリスチャンが罪を犯すことはないということではありません。そうではなく、クリスチャンはまだ「肉」と呼ばれる悪い性質を持っていますから、罪を犯さないのではなく、罪を「犯さないようになる」という意味です。神様がくださった方法を役立てれば役立てるほど、罪はクリスチャンの人生を支配しなくなるでしょう。この勝利を得るかどうかは、以下のことにかかっているのです。

1. 神様のことばを読み、学び、従う。 2テモテ2:15
2. 祈りによって、常に神様に結びついておく。 ヘブル4:14-16
3. 正しく有益な人生のために、自分の体を神様におゆだねする。 ローマ6:13
; 12:1-2
4. 悪いと思うすべての罪を捨て去り、神様にすぐ告白すること。 1ヨハネ1:8-9; テトス2:11-15

C. 未来

— 罪の存在からの救い

これは、キリストが再臨する時に起こります。罪と滅びと死のない体を与えるために、死人と生きている者の両方をよみがえらせるのです。これが、私たちの求めている救いの最終局面です。 ヘブル9:28 ; 1テサロニケ4:13-18

VII. 結果

救いの結果は、たくさんあります。 エフェソ (エペソ) 1:3-14
いくつかを選んで見てみましょう。

- A. 神様と共にいる平和。 ローマ5:1 敵意はまったくありません。
- B. キリストにあって、神様の前に受け入れられます。 エフェソ (エペソ) 1:6
- C. 新しい家族に加わって、神様の子供として喜びます。 ローマ5:10-11;
8:14-17; ガラテヤ 3:26-4:7
- D. 神様のために生きます。 2コリント5:14-15; ガラテヤ2:20;
1ペトロ (ペテロ) 4:2-5
- E. よい行ないと証を持って、神様に仕えます。 エフェソ (エペソ) 2:10;
マタイ5:16; マルコ 16:15-16
- F. 神様に、礼拝と賛美と祈りをささげます。 ヨハネ4:23-24; ヘブル4:14-16;
10:19-22; 13:15)
- G. 天にある永遠の家に、神様といます。 ヨハネ14:1-3; 黙示録22:1-5

あなたは、神様のことばの權威によって、自分が永遠に救われていることを知らなければ、心に安らぎはありません。

救いに関する聖書の教えと実例

第8章

救いに関する聖書の教えと実例

キリストは、3つの方法で救いが起こると定義します。

I. 「新生」によって示される救い

ヨハネ3:3-8

新生は、神様の言葉を信じることによって明らかにされます。ここでの「水」は、神様の言葉の象徴としてよく知られています。

エペソ5:26;

ヨハネ15:3;

詩篇119:9

バプテスマの行為だけで、新生することはありません。ほかの聖書箇所にも出てきて明らかですが、新生は、神様の言葉に従ったときに実現するのです。

1ペテロ1:23-25;

ヤコブ1:18

ちょうど、目の中に入ったゴミを水で洗い流すように、神様の言葉を読んで信じると、神様と救いに関する間違った考えを、罪人の心から洗い流してくれるのです。神様の言葉は、失われた人に光を当てます。

ローマ3:10-19

人の救いを準備する神様の愛は、ヨハネ3:16 罪人が救われる方法なのです。

ローマ10:1-17

II. 神様が人の心に住むことで示される救い

ヨハネ3:5

聖霊は三位一体の第三位格で、キリストが昇天するとき世に送り出され、神様の言葉を使って、人に罪を自覚させます。また、キリストを信頼するように導き、信じた一人一人の心に宿ってくださいます。精神的なことに關する神様の性質や能力をクリスチャンに伝え、生まれ変わった一人一人のクリスチャンを真理へと導きます。ヨハネ16:7-15; エペソ1:13; 4:30; 2ペテロ1:3-4;

ガラテヤ5:22-26

神様の言葉を読んだり聞いたりすると、心に聖霊が力強く働き、人が滅びることや有罪であること、ほかに助ける方法がなくて、希望のない状態であることを示してくれます。そして、キリストにある信仰と十字架の働きを通して、神様のことばによる救いの道を明らかにしてくれるのです。罪人がキリストを信頼した瞬間に、その人はキリストのものだという証印が押されます。これは気分的なものではなく、事実なのです。新しい誕生は、五感で感じるものではありません。

III. 共に生きた人々の証で示される救い

新約聖書とその歴史を見ると、何百万という人々が救いを目撃し、また生きてきました。信仰によって、彼らはキリストが身代わりとなった犠牲を信じたのです。

ヨハネ3:14-16

この聖句の中で、キリストは、新しい命がどのようにして罪人に与えられるかを明確にしました。「どうしてそんなことがありえようか。」というニコデモの質問に対し、キリストは旧約聖書の例を引き、新しい誕生をどのように体験

するか答えたのです。ここで 民数記21:4-9 を読んでください。

このできごとは、7つのことばで要約できるでしょう。どのようにしたら罪人が再び生まれ変わることができるか、キリストご自身が説明しておられるので、特に注意してみましょう。

A. 罪 —

民数記21:5 イスラエルが罪を犯したように、全ての人が、思いと言葉と行ないで、神様に対して罪を犯したのです。 ローマ3:23

B. 裁き —

民数記21:6 彼らの罪が神様の裁きを招いたので、神様はすべての罪に対する怒りを示されました。 ローマ1:18; ヨブ36:18; ローマ6:23

C. 悔い改め —

民数記21:7 イスラエルは気がついて告白し、罪の許しを求めました。これが悔い改めで、心を入れ替え、その結果として態度も変え、それを行ないで表現したのです。神様は、罪人が悔い改めることを求めます。 ルカ13:3;

使徒17:31; 20:21; マルコ1:15

D. 啓示 —

民数記21:8 「そして、主は言われた。」蛇にかまれたイスラエル人を救う方法を、神様がモーセに示されたように、神様は私たちが救う方法を、聖書の中に示されました。 2テモテ3:15-17; ローマ10:8-9

E. 準備 —

9 青銅の蛇が作られ、イスラエル人の全員に見えるように、旗ざおの上につけられました。ヨハネ3:14と比較してください。モーセが青銅の蛇を揚げたように、罪にかまれた人間を救うために、キリストも十字架の上へ上げられなければなりません。キリストは十字架の上で私たちの罪を負い、そのすべての罰に耐え、その死によって、罪人に対する神様の要求を満たしたのです。神様は、子なるキリストを死人の中からよみがえらせることで、その身代わりの犠牲を受け入れたのです。

イザヤ53:5-6; 1コリント15:1-4; ローマ5:7-8

F. 条件 —

民数記21:8 「人が見るとき」青銅の蛇が十字架に上げられても、人々を救うことはできません。見るだけでは不十分でした。一人一人のイスラエル人に求められた信仰の階段があったのです。蛇を見るだけで本当に救われると信じなければなりません。彼らは、信じないで見上げることもできたでしょう。神様が言ったからといって、蛇が人間を本当に救うと信じるのはばかばかしいと、言うこともできたのです。信じた人々を、愚か者だとあざ笑うこともできたでしょう。ところが、蛇にかまれたイスラエル人が生きるためには、蛇を見なければならなかったのです。イエス・キリストが、十字架で私たちの罪のために死んで、救いに必要なすべてを成し遂げてくださったとしても、私たちが救うことにはなりません。失われた罪人として、一人一人が個人的に信仰を持って、神様が言われたことは真実であると信じて信頼するのです。「主を呼び求めるものは誰でも救われるのです。」 ローマ10:13

」蛇にかまれたイスラエル人が、救いを得るために祈ったり、告白したり、よい行ないをするようには求められなかったように、救われていない罪人は、信仰によってイエス・キリストを自分の個人的な救い主と信じるのが緊急に求められています。

ヨハネ1:12; エペソ2:8-9

G. 結果 —

民数記21:9 「彼は生きた。」蛇にかまれた(死んだも同然の)イスラエル人

が青銅の蛇を見た時、彼は新しい命を受けたのです。いわば、再び生まれ変わったのでした。それと同じように、自分の罪のためにキリストが死んでくださったことと、個人的な救い主であるという福音を、失われた罪人が信じた瞬間に、彼は精神的に永遠の命をいただくのです。そのとき、聖霊が心のうちに住んでくださり、神様の性質を帯びる者となり、生まれ変わります。これが新生であり、キリストが宣言したように、まさに神の国に入ることなのです。

ヨハネ3:3,5

救いのための悔い改め

第9章

救いのための悔い改め

I. 改革とは違います。

悔い改めとは、完全に心の中で起こるできごとです。多くの人にとって、それは自分の罪から遠ざかることを意味していますが、これは単なる変革であって、聖書の悔い改めとは違います。また、ざんげとは、何かをすることではありません。人が自分の罪から離れたとしても、まだクリスチャンではないのです。

II. ざんげとは違います。

ざんげとは、罪を悲しむ行為です。いろいろな宗教で、多くの人々がざんげと呼ばれることをたくさんします。犠牲をささげたり、苦行をしたり、指導者に祈ってもらうためにお金をささげたり、自分自身で長い間祈ったり、連鎖祈禱を繰り返したり、ざんげ室に入って自分の罪を告白したり、宗教的儀式に参加したり、それらすべては自分の罪を取り除くことを願ってするものです。

III. 後悔とは違います。

悔い改めは、罪を悲しんで許しを請う感情ではないことを確認しました。牢獄にいる多くの人々は、自分のしたことを悲しみますが、その犯罪を消し去ることはできません。本当の悔い改めは、罪に対する悲しみをまちがいなく含んではいますが、罪に対する悲しみは悔い改めではなく、悔い改めに導くものにすぎないのです。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」 **2コリント人7:10**

IV. 意見の変化ではなく、心の変化です。

本当の悔い改めとは、心の変化であり、行ないを変えるものです。しかし、心を変えないでも、行ないを変えることも覚えておきましょう。

マタイ21:28-

29は、そのよい例です。人が救われる前には、罪や自我や神やイエス・キリストに対する心を変えるに違いありません。事実、悔い改めとは、神様と反対側に立っていた「古い自分」が神様の側に身を置くことなのです。

V. 神様の働きです。

悔い改めとは、罪の重荷のために救い主が必要であるということ、神様が

私たちに深く認識させてくださることで、そして、その認識を通して、神様が私たちの良心に働きかけてくださり、救いを選択しなければならないと私たちが決断するのは、神様に従うか、あるいは今まで通りの道を進むかの決断をします。方向を変えるためには、悔い改めて、救ってくださいと呼び求めるのです。この決断の結果、心が変わられ、私たちと神様の関係が変わります。4つの変化によって、悔い改めが明らかになるのです。知的な変化、感情の変化、意志の変化、そして行動の変化です。

人生を迷ったりとまどったりして過ごしている人は、本当の悔い改めを求めています。そういったときに、注意を引くものに、急に会うのです。神様の言葉を聴くとき、その人は立ち止まり、自分が間違った道を進んでいることに気づきます。このまま進むか、向きを変えるか、今どちらかを選ばなければなりません。悔い改めとは、向きを変えて、反対方向に進むことです。神様の道を進む決断をすることなのです。

救いは恵みです 第10章 救いは恵みです

I. 初めに

現代の私たちに対する神様の態度は、恵みとあわれみと平和に満ちています。恵みとは、「あふれるばかりの神様の好意」です。神様は、私たちに好意を示されますが、私たちにはそれを受け取る資格がありません。だから、私たちは救いをただで受けているのです。恵みという言葉は、聖書の中に**160**回以上出てきます。そのうち**128**回は新約聖書に出てきます。神様は、「あらゆる恵みに満ちた神」と呼ばれるのです。**1ペテロ5:10** キリストは、「恵みに満ちている方」と表現されます。

ヨハネ**1:14** 聖霊は、「恵みの聖霊」と呼ばれます。

ヘブライ（ヘブル）**10:29**

このようにして、位格の3つの神性は、恵みで密接につながっているのです。

II. 定義

旧約聖書で使われている恵みという語は、「目下の者に対して親切にすることか、身をかがめる」という意味です。新約聖書では、「好意、誠意、慈愛」を意味します。

以下の定義は、恵みとは何かを説明する助けになるでしょう。

A. 恵みとは、それを受けるにふさわしくない対象に対して示された、愛のことです。神様は愛です。しかし、その愛が、罪を犯して汚れた反逆的罪人に与えられるとき、それは恵みに変わります。

B. 愛が神様に向けられると、それは礼拝です。愛そのものだけなら、単なる愛情です。愛が降り注がれると、それは恵みになるのです。

C. 恵みとは、怒りと裁きしか受ける資格のない私たちに、神様が愛とあわれ

誰にも、救いを受ける資格はありません。「わたしたちは、この御子において、その血によって贖（あがな）われ、罪を赦されました。これは神の豊かな恵みによるものです。」

エフェソ（エペソ）1:7 しかし、神様は聖なる存在なので、罪を見過ごすことができません。罪は罰せられなければならないのです。十字架のすべて意味は、ここにかかっています。福音は、神様がどのようにして罪人を恵みで救い、聖なる者とされるかを告げるのです。

大事なことは、罪に対する神様の怒りと裁きをキリストが受けられたという点です。人の行ないではなく、キリストのわざによって、神様は、主キリストを信頼する人々の罪を赦すのです。殺された子羊なるキリストは、あがないのわざを終えられました。救いを求める罪人に必要なのへ、信仰です。それは恵みによるのです。エフェソ（エペソ）2:8-9

VI. 恵みによる祝福

恵みによる祝福は、たくさんのすばらしい結果を罪人にもたらします。その中でもっとも大きなものは、次の3つです。

A. 救い — テトス2:11-13
これは、生まれ変わったクリスチャンが、永遠の命を持っていることを意味します。「わたしは彼らに永遠のいのちを与える。彼らは決して滅びない。」
ヨハネ10:28

B. 義とされること —
ローマ5:1 これは、キリストのゆえに罪が赦されたと信じる罪人を、神様が招いておられることを意味します。「信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって、神との間の平和を得ている。」 ローマ5:1

C. 神様の前に立つ —
ローマ5:2 これは、本当のクリスチャンが、祈りによって神様の前に立つことができることを意味します。もはや、罪によって神様から切り離されているではありません。「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」
ヘブライ（ヘブル）4:14-16

救いの真理 第11章 救いの真理

信仰の重要性を理解しないで、聖書を勉強し続けることはできません。「罪人は、信仰なしでは救われないからです。」エフェソ（エペソ）2:8-9「福音は、……信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。です。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」
ローマ1:16-17

ですから、信仰がどんな意味を持っているかを知ることが、重要なのです。

I. 信仰とは何ですか。

信仰は、知識と信じることと信頼の3つから成り立っています。信仰は、個人的な確信なのです。私たちは、日常会話の中で、次のように使います。「私は、お医者さんを本当に信じています。」それは、自分が、お医者さんを信頼しているという意味です。同じように、聖書においても、信仰は神様を個人的に確信することなのです。神様の言うことを信じ、私たちを救って導いてくださると信頼することなのです。

II. どこで信仰を見出しますか。

世界中を見回すと、神様を信じないために、救われていない人がいます。だから、私たちは信仰の本質について調べるのです。ある意味でこの信仰とは、神様からの賜物なのです。

ヨハネ**3:27** 神様は、神様を信じる力を人に与えてくださいます。

しかし、人はどうやって信仰を受け取るのでしょうか。この答は、ローマ**10:17**

です。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まります。」

ですから、神様を信じていない人は、聖書を読まなければなりません。読み進みながら、次のように祈るべきです。「神様、もしこの本があなたの言葉なら、もしイエス・キリストがあなたの息子なら、もし彼が私のために死んでくれたのなら、私が聖書を読み進むときにそれらを示してください。」誰でも神様の御心を行おうと願う人なら、真理の知識に到達するでしょう。 ヨハネ**7:17**

III. 信仰の本当の対象は何ですか。

信仰には、信じる対象があります。それは、親戚や友人のような人間だったり、飛行機やエレベーターのように生命のない物であるかもしれません。しかし、そういう信仰だけでは、不十分です。信仰とは、信じるに値する対象でなくてはなりません。飛行機は、ある町からある町まであなたを運んでくれる、と信じることができます。飛行機は飛ぶものだ、と信じることもできます。パイロットは飛行機の操縦を知っていて、あなたを行きたいところへ連れて行く、と信じることもできます。飛行機で旅行するのは楽しいものだ、と信じることもできます。あなたのすることといえば、飛行機の座席を確保することぐらいです。それが、飛行機に対する信仰なのです。あなたは、そう信じていることをほかの人に話したとしましょう。しかし、飛行機に乗り込むまでは、その信仰を確かめたことにはなりません。本当の信仰は、行動を伴うからです。聖書は、「信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」

ヤコブ**2:17-18**

聖書は、イエス・キリストを信仰の真の対象としています。
使徒**20:21** 大切なことは、どれくらいの信仰を持っているかとか、どんな種類の信仰を持っているかで救いが決まるものではありません。信仰の対象がイエス・キリストであるかどうかにかかっているのです。聖人・処女マリア・偶像・教会・宗教・良い行ない・バプテスマなどを信じる対象にしているなら、聖書の救いはありえないと聖書は明言します。ところが、キリストについて聖書が教えるすべてのことを信じたからといって、キリストを信じたことにはなりません。ある電車が駅を午前**11**時に発車して、午後**5**時に遠くの町に到着する

と信じることはできます。電車に関するすべての事実を信じることはできませんが、あなたが電車に乗り込んで、目的地まで連れて行ってくれる電車を信頼しなければ、電車を本当に信じたことにはならないのです。

同じように、キリストがベツレヘムで処女から生まれ、カルバリー山で死に、よみがえり、天に上げられたことを信じることはできます。聖書が神様の言葉だと信じることもできます。しかし、キリストがあなたの罪を赦し、あなたを天に連れて行ってくださると信じなければ、本当の意味で信じたことにはならないのです。

IV. 信仰の事

聖書には、信仰の具体例がたくさんあります。ヘブライ（ヘブル）人への手紙11章は、信仰を持った何人かの有名な男女が列挙してあるので、「信仰の名誉一覧表」と呼ばれてきました。

そのほかに、2つの例が引用されています。1つは、マタイ8:5-10に出てくる百人隊長の信仰です。百人隊長は、キリストの言葉だけで部下を治せると信じました。もう一つは、マタイ15:22-28に出てくるカナンの女の信仰です。彼女は、選民のユダヤ人たちにとってあったパンを、異邦人の自分にもくれるように懇願したのです。彼女の信仰は謙遜で、いちずでした。

V. 信仰の報酬

本当の信仰は、決して無報酬ではありません。意味もなく神様を信じてきた人は、今まで誰もいなかったのです。信仰が、知識と信じることと信頼の3つから成り立っていることを思い出してください。罪を悔い改め、主イエス・キリストを救い主と信じた罪人は、誰でも救われるのです。救い主は言われました。「わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。」ヨハネ6:37

教会 第12章 教会

教会を、2つの面から考えてみましょう。教会は物理的な集合体ではなく、精神的な集合体です。キリストのからだを意味する地上の教会があり、クリスチャンたちは目に見える場所としてそこに集います。そこは家であったり、集会のために建てられた特別な建物であったり、ほら穴であるかもしれません。人が集まる物理的な構造物が、教会なのではありません。地上の教会とは、神様の言葉を受け入れ、生まれ変わり、バプテスマを受けたクリスチャンの集まりのことなのです。クリスチャンは教えを学んだり、祈ったり、聖餐式をしたり、交わりをするために集まります。使徒 2:41-42

また、現在の地球という惑星に住んでいる、すべての生まれ変わったクリスチャンからなる普遍的な「教会」があります。もしあなたが今日救われているなら、この普遍的な教会の会員なのです。ある人たちは、その教会を「目に見えない教会」と呼びます。

教会に与えられている2つの儀式に、バプテスマと聖餐式があります。これらは秘跡ではありません。それ自体には、救いの価値がまったくないからです

。イエス様は言われました。「わたしの記念としてこのように行いなさい。」
ルカ22:19

ある宗派の人々は、聖餐のパンを受けることで、本当にキリストの臨在とからだにあずかると宣言します。ところが、記念するのは今いる人ではなく、いない人を記念するはずです。パンは、十字架上で私たちのために裂かれたキリストのからだを象徴するだけなのです。杯は、私たちの罪のために流されたキリストの血の象徴なのです。両方とも、キリストが再び来られるまで、キリストが私たちのためにしてくださったことを思い出すために行われます。

1コリント11:24-29

バプテスマは、あなたがクリスチャンになったことを示すためであり、主の聖餐は、主イエス様が再び来られるまで、私たちのためにしてくださったことを思い出すためなのです。これらは、クリスチャンだけによって守られます。

エフェソ (エペソ) 4:7-

8, 11にあるように、初代教会の宣教目的を達成するために、いくつかの賜物が人々に与えられました。現在の私たちは、聖書を通して神様のことばの完全な啓示をいただいているので、使徒と預言者の賜物はありません。啓示と預言は、もはや必要ないのです。ある人たちが啓示や預言を受けたと言っても、それは嘘です。実際、付け加えられたり削除されたりした啓示は、のろわれるべきものです。

黙示録

22:18-19

どの教会も独立した自治体であり、地上の教会には組織があります。クリスチャンたちを導いたり、教えたり、牧会するために、執事や監督や長老 (牧師) たちがいます。1テモテ3:1-15

また教会には、信条を守る権威や、罪に生きる選択をした人々を除籍する権威も与えられています。1コリント5:11-12

死 第13章 死

人は、未来について、いつも真剣な興味を抱いています。死後の命は、普遍的にも歴史的にも、存在すると信じられています。世界中の証拠 (宗教的儀式) によると、人は死んですべてが終わるのではないと、信じられています。次のような質問を、よく受けます。「死んだ人はどこに行くのですか。」「天国はありますか。」「苦しみを受ける場所はありますか。」「それは、どんなところですか。」

人間は、3つの要素が1つになっている存在です。つまり、人間はからだと魂と精神から成り立っています。

1テサロニケ5:23

からだは物質的な存在で、ほかの2つは物質的なものではありません。人は精神で神様を認識し、魂で自己を認識し、からだで世界を認識します。精神と魂は、神様の言葉によってだけ区別することができるのです。ヘブライ (ヘブル) 4:12

魂と精神は、死ぬときからだから離れます。からだは墓に埋められます。クリスチャンが死んだ場合は、からだは眠っていると表現され、使徒7:59,

60;

8:2

救われてない人が死んだ場合は、死んでいると言われます。魂と精神は、決

して眠りません。もし救われた人が死んだらその精神と魂は、喜びと幸せの場所 — 天国へ行くのです。 2コリント5:8; ピリピ (フィリピ) 1:21-23
もし救われていなかったなら、その精神と魂は、悲しみと罰の場所 —
地獄へ行くのです。 ルカ16:19-

31で、死んでしまった人にも意識はあると、私たちの主がはっきり教えておられます。

死は、魂が眠ることではありません。キリストの死を聖書のことばで言うなら、死は「休む」という意味なのです。「無意識になること」ではありません。からだは死ぬかもしれませんが、魂と精神ははっきりと目覚めていて、決して死なないのです。聖書における死とは、いつも分離を意味します。肉体的な死は、魂と精神がからだから分離されることです。精神的な死とは、神様から永遠に切り離されることなのです。

私たちは、魂と精神を持ったからだではなく、からだを持った魂と精神であることを理解してください。死とは単純に、「魂と精神がからだから離れた」という意味なのです。

クリスチャンのよみがえり 第14章 クリスチャンのよみがえり

聖書は、からだのよみがえりについて何度も述べています。聖書のいくつかの箇所、ある人たちは死からよみがえっているのです。これらは、神様の力が死に打ち勝つことを示す奇跡なのです。しかし、その人たちは、結果的にはやがて死んだのですから、からだが生き返ったというよりは、むしろ、いのちに「引き戻された」のでした。ラザロがそのいい例です。 ヨハネ11:39-44

死とからだのよみがえりの最初の例は、イエス・キリストです。キリストは、死人から初めてよみがえった初穂です。「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」

1コリント15:20

聖書がクリスチャンの死を表現するときは、死んでいるとしないで、いつも「眠っている」と表現します。キリストが死者の中から初穂としてよみがえったのは、やがてすべての人をよみがえらせるという、神様の約束だったからです。

キリストのからだであり、真の教会であるクリスチャンは、からだそのものがよみがえるでしょう。「キリストにある死者が、まず初めによみがえるでしょう。」

1テサロニケ4:16

これは、キリストにあつて死んだすべての人のからだ、よみがえることです。その人たちは、魂や精神と結び合わされ、イエス・キリストの花嫁として天に上げられるのです。これが教会の「携挙 (けいきょ・人を天国へ運び去る)」と呼ばれるものです。このことについて、もう少し説明しましょう。

キリストのからだ、よみがえったあと、500人以上の人々がそれを目撃しました。目撃者の証言は、信じない人々の反対をものともしなかったのです。裁判所で証言を求められた証人は7人でした。新約聖書は、イエス様を個人的に見た人々の証言を記録しています。500人以上の人々が、イエス様のからだのよみがえりを見たのです。イエス様を見たそのほかの人々は、イエス様が生き

ていることを証言しました。彼らは、イエス様がむごい十字架にかかり、警護された石の墓からからだをよみがえらせて出てきた後、イエス様と共にいる間、話したり、食べたり、交わりのときを数回持ったのです。イエス・キリストが、死人の中からからだを持って実際によみがえったという、きわめてはつきりした証拠があります。

新約聖書の27巻と教会は、キリストがよみがえったことの証拠なのです。キリストが十字架にかけられて埋葬されたエルサレムで、使徒たちが宣教を始めたとき、教会はたちまち広がりました。3000人の人々が、1日で救われました。彼らはいたるところへ出かけ、イエス様が死人の中からよみがえったと宣べ伝えたのです。もしこれが事実でなければ、反対派の人々が死体を持ち出してきて、初代教会のすべての主張を黙らせたのは確実です。事實は、十字架に架かった3日後に、イエス様はからだを持って墓からよみがえられたのです。イエス様は存在しておられ、イエス様が生きておられるから、私たちも生きているのです。

地獄 第15章 地獄

すでに見てきたように、未信者の精神と魂は、死とともに地獄へ行きます。地獄とは、罰を自覚できるところです。地獄における魂は、目や耳や指や舌や記憶を持った人として語られています。そこでは、知覚できる器官が十分働くのです。 **ルカ16:23-**

25 これはたとえ話ではありません。なぜなら、たとえ話には人々の固有名詞が出てこないからです。これは、本当のできごとなのです。

聖書は、すべての人類の最後の審判のとき、苦痛の場所がもう一つあるといっています。それは「火の池」と呼ばれています。最後の審判のとき、地獄へ行った魂は墓からよみがえったからだと結びつくのです。そのときキリストは、邪悪な死人たちに最後の審判を下し、神を信じなかった人々が行く永遠の場所である火の池に、彼らを投げ込むのです。黙示録**20:11-15**。そういう意味で、地獄は、この世の刑務所のようなものです。囚人が判決を受けるまで一時的に待つところなのです。彼らは、最終判決の裁判のために、刑務所から引き出されるのです。黙示録**20:9-**

15は、キリストを拒んでサタンに従ったすべての人々とサタンを裁く、最後の審判の記録です。火の池は、終身刑を受けた人々が入られる牢獄にたとえられます。地獄を表現するのに、主は「蛆が尽きることも、火が消えることもない」と描写しています。 **マルコ9:43-**

48 そこは、罰を自覚できる場所であり、実際に火が燃えている場所です。それが、罪に対する永遠の罰なのです。

黙示録における「世々限りなく」という語句は、捨てられた者の悲惨さを表現しています。黙示録**14:11** 愛の神様が、人を地獄へ行かせるのでしょうか。

A. 神様は、人を滅ぼしたくありません。一人一人が地球という惑星で生きている間に、天国であれ、地獄であれ、自分の個人的な選択として決断するものです。神様は、その一人子をカルバリーの十字架につけて、人を救うようになさいました。 **ローマ5:6-**

8人がもし救い主を拒めば、その人たちは自分の選択によって地獄に行くのです。ある人が言ったように、神様は罪人をとて愛しておられるので、人が天国よりも地獄へ行くのを選ぶなら、そうさせるのです。彼らがそうするのは、すべて自分の意志によるのです。

B. 神様は愛の神様

1ヨハネ4:8

ですが、同時に聖なる方 1ペトロ(ペテロ) 1:16でもあります。罪を罰する方なのです。もし罪が天国に入ってしまったなら、神様が人類を救うためになさったすべての計画を壊してしまうでしょう。サタンは、エデンの園で罪を選択しました。人は、その生涯の間にどちらかを選ばなければなりません。人の永遠の運命は、死ぬときに定められます。煉獄(れんごく・天国に行く前にとどまる所)や中間的な場所はありません。聖書は、ただ2つの場所があるだけだと明言します。「こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのです。」

マタイ25:46

C. 人は、迷わずに病人を病院に入れ、犯罪者を牢獄に入れ、死体を墓に入れます。これは、人に愛がないからそうするものではありません。福音をまったく聞いたこともない異教の人々は、どうなるのでしょうか。ほかの人々のように、異教徒も滅びゆく罪人ですから、キリストだけが救うことができるのです。彼らも創造されたものを見たり、ローマ1:20, 詩篇19:1 自分の良心を通して、ローマ2:15

神様は存在するということがわかります。もし彼らがイエス様に向かって生きるなら、神様はさらに光をくださることでしょう。使徒の働き(使徒言行録)10章と11章のコルネリウスを見てください。

天国 第16章 天国

聖書がはっきり教えていることは、神様なるイエス・キリストを知って、愛するすべての人々には、天国と呼ばれる場所があるということです。天国は場所なのです。この言葉は、聖書の中で3つの違った表現で使われます。まず初めに、雲があるところを天と呼びます。創世記1:8

次に、星があるところも天として知られています。創世記1:17

最後に、神様のおられるところを指すのです。パウロは、そこを「第三の天」とか「楽園」とか呼んでいます。2コリント12:2-4

天は、いつも「上」にあるものとされています。サタンは イザヤ14:13-14で、「私は天に上り」といいました。私たちは、神様が今も天におられることを知っています。イエス様は、死人の中からよみがえられたあと、肉体と骨のあるからだで昇天されたのです。栄光を受けた人を、天に移されたのでした。ルカ24:38-39, 51; 1 ペテロ3:22; ヘブル1:3

天には、おびただしい数のクリスチャンがいます。なぜなら、真のクリスチャンが死んだとき、「体を離れて、神様のもとに住む」からです。

2コリント5:8

クリスチャンたちは、キリスト共にいることをこの上もなく喜んでいます。

ピリピ1:23

天とはどんなところでしょうか。そこは、神様のもとにやってくるすべての人のために、神様がご用意された場所なのです。もし宇宙の創造主なる神様がご用意されたのなら、そこはとてすばらしいところに違いありません。聖書を書いた記者たちは、そこを表現する言葉を見つけることができませんでした。 黙示録21:10-

27で、ヨハネは天国の土台、壁、門や通りを表現しようと試みました。その清らかな場所には、病氣、悲しみ、涙、痛みも死もまったくなく、私たちは知っています。 黙示録21:4

この罪にのろわれた地上での人生の悲しみと苦しみが終わると、私たちは「永遠の家」にいることになるのです。しかし、最もすばらしいことは、神様なるイエス・キリストがそこに共におられ、そのことが、すべてのクリスチャンの最高の喜びになるのです。

将来のできごと 第17章 将来のできごと

聖書を学ぶ人なら、将来起こるできごとについて知りたいという衝動に、誰でも駆られることでしょう。聖書だけが、将来のことを明らかにしています。これらのできごとのいくつかを、起こる順番に考えてみましょう。

I. キリストの再臨は、聖徒のため

神様のご計画で次に起こることは、キリストが再臨して、ご自分の民を天の御国に連れて行くことです。 1テサロニケ4:13-18

これは、教会の「携挙（けいきよ・クリスチャンを天に運び去る）」として知られています。キリストが天から来られ、トランペットが鳴り響き、死んだクリスチャンのからだはよみがえります。それから、生きているクリスチャンが彼らと共に天に上げられ、空中で神様と出会うのです。

このことは、目をまばたきする瞬間に起こるでしょう。聖書のこの箇所は、これらのできごとを画面ごとに説明しています。ゆっくり、注意深く読んでください。なぜなら、あなたがイエス・キリストを自分の救い主として今日受け入れるなら、それはあなた自身について書かれたものだからです。

1コリント15:51-58 それは、今日起こるかもしれないのです。

キリストの再臨に関する以下のことに注意してください。

- A. それが起こるのは、瞬間的かもしれませんが。 黙示録22:7
- B. 真に救われている人々だけに起こるでしょう。 1コリント15:23
- C. すべてのクリスチャンが死ぬのではなく、すべてのクリスチャンが変えられるでしょう。 1コリント15:51
- D. すべてのクリスチャンがキリストに似た者となるでしょう。 1ヨハネ3:2;
ローマ8:16-25

II. 大艱難

マタイ24:5-

31と黙示録の大部分は、地上における大艱難の期間を扱っています。携挙（けいきょ：クリスチャンを天に運び去ること）のあと、地上では大艱難として知られる大いなる苦しみや悲しみの期間が続きます。この期間、ユダヤ人たちは、信じないままでパレスチナの地に戻ります。大いなる悪の支配者が、「反キリスト（キリストに反対すること）」として出て来ます。人々に、自分を拝めと要求します。イスラエルを欺きます。それはあまりにも大きな艱難なので、その期間が短くされなかったら、誰も生きながらえることはできないでしょう。ところが、神様は、忠実なユダヤ人たちを守られるのです。

III. キリストの支配

大艱難の初めの3年半は、反キリスト者がユダヤ人の味方になりすまし、表面上は守ってくれるものだとユダヤ人たちに確信させます。その3年半を過ぎると、反キリスト者はユダヤ人に敵対し、自分が本当は誰なのかを明らかにします。それから、今までなかったような大きな迫害と戦いが起こり、ハルマゲドンの戦いで終わるのです。

マラキ4:1-3

大艱難の終わりには、神様なるイエス・キリストが、天に上げられた人々と共に、偉大なる力と栄光のうちに地上に戻ってきて支配します。キリストは、忠実なユダヤ人たちを迫害した敵と反キリストを滅ぼし、その国々を裁くでしょう。サタンは、1000年の間、底なし地獄に閉じ込められます。 黙示録20:1-3

IV. 千年王国

イザヤ32:1; 35:1-7; 65:17-25 裁きが終わるとき、キリストは地上にご自分の王国を建ててください。エルサレムがその首都になります。彼は、地上を1000年の間支配するのです。この期間が、千年王国として知られています。平和と幸福な時代です。自然はまったく異なった状態になり、ライオンが子羊と共に寝そべるのです。砂漠にはバラの花のようなものが咲き乱れます。人は、かなり高齢まで生きるでしょう。大いなる繁栄の時代です。戦争はまったくありません。罪がまったくなくなるわけではありませんが、罪は起こるたびにたちまち罰せられるのです。

V. 最後の審判

黙示録20:11-

15 キリストが千年間支配した後、最後の審判が始まります。これは、邪悪な死んだ人々の裁きです。救われている人は含まれません。クリスチャンでない人のからだは墓から出てきて、その魂は地獄から出てきます。そのあと、裁きを受けるために、キリストの前に立ちます。数々の書物が開かれます。

黙示録20:11-15

彼らのすべての行ないが裁かれます。最後に、その名前が子羊の命の書に見つからない人は有罪とされ、身を焼かれる永遠の刑罰を受けるために、火の池に送られる判決を受けます。

VI. 永遠

黙示録20:1-

8 未来の最後は、永遠です。ごぞんじのように、地球は火によって焼き滅ぼ

IV. 罪を犯したら、すぐに告白しましょう。 1

ヨハネ1:9

考えにおいても言動においても、罪を犯し天の父を悲しませたと感じたなら、すぐに告白して、神様の赦しを求めましょう。それを、夜までや週の終わりで延ばさないようにしましょう。 箴言28:13

V. 神様のために熱心になりましょう。

「怠惰は、悪魔が働くのに好都合」とある人は言いました。あなたの体を神様に捧げ、神様が用いられたいように仕えましょう。 ローマ6:19
仕事は十分にありますし、あなたは最高のご主人に仕えることとなります。

VI. 運動をしましょう。

体を動かすことは、有益です。 I テモテ4:8
クリスチャンの体は、聖霊の神殿です。適度な方法で健康を維持し、体力をつけるべきでしょう。しかし、スポーツのとりこになり、霊的なものがおろそかにならないように気をつけましょう。 1コリント6:19-20

VII. 古い罪の性質を取り除きましょう。

読むもの、見るもの、行くところ、聞くものに気をつけましょう。
コロサイ3:5-9

VIII. 新しい性質に活力を与えましょう。

あなたの心が、キリストで満たされるようにしましょう。イエス様のことを考えながら、同時に悪いことを考えることはできないはず。 コロサイ3:10

14 清い生活の秘訣は、キリストで満たされることです。そうすれば、礼拝し、崇拝している対象に似てくるはず。 2 コリント3:18
には、み言葉の鏡によって、キリストを映し出せば映し出すほど、私たちはキリストに似る者となることが約束されています。私たちに宿っておられる聖霊が、私たちをキリストの似姿へと変えてくださいます。ほかのものに熱中すれば気が散り、自分に固執すると苦悩が増えますが、キリストで満たされる時、喜びが与えられるのです。

IX. 最後の一言。

今まで述べたように、誘惑に陥らないようにすることは、たった一度の経験ではありません。いつも神様に頼って生きていくことが大切です。私たちが何歳になっても、どんなに聖書を学んでも、イエス様から目を離すと、誘惑に身を任せてしまうという危険が付きまといま。ある大変信仰深い人は、神様が自分を守ってくださり、邪悪な者として死なないようにと祈っているそうです。私たちにも、このような祈りが必要です。 コロサイ3:1-4

クリスチャンの行い
第19章
クリスチャンの行い

クリスチャンは、良い行いと悪い行いを、どのようにして知るのでしょうか。クリスチャンがダンスに行ったり、トランプに興じたり、映画に行ったりすることは、はたしてよいことでしょうか。また、タバコを吸ったり、お酒を飲んだり、ロックを聴いたり、そのほか、この世の快樂や娯樂に興ずることは、正しいことでしょうか。 **1ヨハネ2:15** には、「世も世にあるものも、愛してはいけません。」と書いてあります。

多くの新しいクリスチャンは、同じような疑問を持ってとまどいます。聖書の中には、はっきりと禁止されてる習慣や行為はありますが、書かれていないものも多くあるのです。この章では、聖書に書かれていない行いの中で、善悪を判断するための基準を提供します。基本的には、「イエス様は、そのことをするだろうか。」ということが、答となります。

I. まず始めに、その行いは、クリスチャンに対して神様がはっきり禁止されていますか。

はっきりと禁止されているなら、「死に至る病を避けるように、避けましょう。」判断できないときは、それが良いこととはっきり分かるまで、近よらないようにしましょう。 **1テサロニケ5:22**

II. それをすることによって、神様に栄光があるでしょうか。

1コリント10:31 には、「何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」とあります。その行いをする前に、「それを祝福してください。」と、神様に素直に祈れるでしょうか。あなたがそれを行うとき、神様の榮譽につながるものと信じられますか。

III. それはこの世的でしょうか。もしそうであるなら、クリスチャンの行いではありません。

「わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。」 **ヨハネ17:16** イエス様はこの世におられました。この世に属してはいませんでした。 **1ヨハネ2:15-17**

IV. 神様は、そのことをされたでしょうか。イエス様は、私たちが従うべき模範を残されました。 **1** **ペテロ2:21**

V. 神様が再臨される時、あなたがしていることを見られてもかまいませんか。

「もし神様が戻って来られたとき、恥ずかしいと思うことは、するな、言うな、そしてそんな場所には行くな」とは、賢い助言です。 **1ヨハネ2:28**

VI. 心に宿っている神なる聖霊を意識して、恥じることなく、そのことができますか。

「知らないのですか。あなたがたの体は、神様からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」

1コリント6:19; エフェソ (エペソ) 4:30

VII. 神の子にふさわしい行いでしょうか。

王子がふさわしくない行いをしたとき、父である王に不名誉がもたらされま
すふさわしくない行いをするクリスチャンも、それと同じです。

ローマ2:24; コロサイ1:10

VIII. その行いは、ほかの人にどのような影響を与えるでしょうか。

まだ、救われていない人への証になるでしょうか。それともクリスチャンも
クリスチャンでない人も、変わりはないと、その人たちは思うでしょうか。 2
コリント5:17

また、新しいクリスチャンのつまづきにならないでしょうか。使徒パウロは「
つまづきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心し
なさい。」と注意しています。ローマ14:13

IX. 最後に、あなたの心に少しも疑いがありますか。

もし疑いが少しでもあるなら、するべきではないでしょう。「疑いながら食
べる人は、確信に基づいて行動していないので、罪に定められます。確信に基
づいていないことは、すべて罪なのです。」と書いてあります。ローマ14:23

クリスチャンの行いに関して心に留めておくべきことは、「あなたがたは律
法の下ではなく、恵みの下にいます。」
ローマ6:14-15

これは、何でもしたいことをしてよいと言う意味ではありません。むしろ神
様が、私たちのために多くのことをしてくせさったので、私たちは、神様が喜
ばれることをしたいと望むようになるということです。私たちがこの世的な楽
しみや娯楽を避けるのは、してはいけないからではなく、したくなくなるから
です。それは、イエス様が私たちのために死んでくださったので、今の私たち
は、イエス様が喜ばれるような生き方を志すのです。 2コリント5:14-15

神様は「もしあなたが快樂を求めなければ、クリスチャンです」とは言われま
せんでした。実際、神様は「あなたはクリスチャンです。さあ高貴な招きにふ
さわしい生き方をしなさい。」と、クリスチャンに言われています。

エフェソ (エペソ) 4:1

クリスチャンがその高貴な立場を忘れ、この世のものを求めることもありま
す。そのような時は、羊飼いが迷える羊を杖で連れ戻すように、神様が愛を持
ってその人を正して、連れ戻してくださいます。そのように、もしクリスチャ
ンが神様の恵みを忘れたとしても、神様はご自分のお力によってその人を連れ
戻してくださいます。

バプテスマ

第20章

バプテスマ

洗礼 (バプテスマ) とは何でしょうか。また誰が受けるものなのでしょうか

。イエス様は、天に昇られる前に、大宣教命令を弟子たちにお与えになり、言われました。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。アーメン。」
マタイ28:19-20

この聖句からも分かるように、神様の僕たちが世界中に福音を携えて行き、福音を受け入れた人たちに洗礼を授けることは、神様の望まれていることなのです。洗礼の儀式は、神様ご自身によって制定されたのですが、二つの疑問が残ります。それは、その儀式はどのように行われるのかということ、そして、洗礼の意味は何かということです。

使徒言行録8:26-39 を読めば、この最初の質問の正しい答が分かります。ここには、エチオピアの女王の宦官が、車に乗って、旧約聖書のイザヤ書53章を朗読していたことが書かれています。この宦官が熱心に真理を探し求めていたので、神様はご自分の僕であるフィリポを、彼のもとに送りました。フィリポは、罪人を救うためにイエス様が十字架で死なれたことを彼に話しました。宦官はイエス・キリストを信じ、洗礼を受けることができるかとフィリポに尋ねました。フィリポは、彼が心からイエス様を信じているのなら受洗できると言い、洗礼を授けることに、同意しました。そして、水のある所で車を止めました。さて38節と39節に注目してみましょう。「そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。彼らが水の中から上がると、神様の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。」とあります。この儀式、つまり何百年も前にこのエチオピアの宦官に授けられ、そして今日に至るまで行われ続けている洗礼の真意は、一体何でしょう。

I. 洗礼を受けることは、イエス様の御心に従うことを明確にする行為です。
マタイ28:19

洗礼の目的は、肉の汚れを除くということよりも、むしろクリスチャンがみ心を行ったという、神に対する確信が与えられるためです。 1 ペテロ3:2
洗礼は、福音を聞き、信じた人だけが受けるものです。 使徒18:8

II. ローマ6:3-

5 によれば、洗礼は霊的真理の形ある象徴であることが分かります。

- A. 洗礼の水は、裁きと死を表します。
- B. イエス様が死なれたとき、私達の罪を取り除くために、イエス様は裁きと死である水の中に身を沈めました。 詩篇42:7
- C. キリストはクリスチャンの身代わりとなって死なれたので、クリスチャンも同じように、イエス様と共に死んだといえます。つまり、キリストが死なれた時、クリスチャンも死んだのです。そしてキリストが葬られた時、クリスチャンも葬られ、よみがえられた時、クリスチャンも共によみがえったのです。
- D. クリスチャンは、罪、この世、そして自分に対して死にました。生まれながらの罪ある肉적인自分に死んだのです。その時から神様は、もはやその人を罪の中にいる者とは見なさず、キリストにあって死からよみがえり、復活したキリストの命に生きる者としてくださったのです。 ガラテヤ2:20
- E. 従って洗礼を受けるときクリスチャンは、自分がキリストと共に死に、葬られたことを人の前で告白します。そして、キリストにあって新しいいのちを

授かったことを、誰にでも証していくべきなのです。 コロサイ2:12; 3:1-2

III. 洗礼を受けた人は、ただ水で洗礼を受けただけでなく、以前の肉的な生活が葬り去られたのです。洗礼は、行いとして表現された信仰告白であります。同時に心も問われます。

初期の教会では、クリスチャンが洗礼を受けるとすぐに迫害され、殺害されるということが多くありました。それでも新しく救われようとする人は、殉教者の後を継ぐために、進んで洗礼を受けたのです。 **1 コリント 15:29**
今でも異教の地では、洗礼を受けることが、迫害を意味するかもしれません。口で信仰を告白するだけなら許されるでしょう。しかし、多くの国では、洗礼を受けて、イエス様への信仰を公に告白すると、イエス様の十字架に敵対する人たちから、迫害を受けることになりかねません。

それでも、たとえどんな犠牲があろうとも、洗礼を受けた人は、エチオピアの宦官と同じ喜びを経験するのです。彼は、「喜びにあふれて旅を続けた。」使徒**8:39**と書いてある通りです。

真の教会 第21章 真の教会

クリスチャンは、どの教会に所属すればよいのか、どのようにしてわかるのでしょうか。この話を始めるにあたって、まず大事な点は、真の教会につながるということは、改心したその時点からすでに始まっているということです。ここで言う真の教会とは、主イエス・キリストという土台の上に、人種、皮膚の色、または文化の違いを超えて、全ての真の信者から成り立つ共同体を指します。教会全体が一ヶ所に集められたことはまだ一度もありませんが、教会員は世界中にいるのです。

しかしながら、クリスチャンは教会の一員として共に集い、聖書で教えている役割を担っていくことができます。この諸教会は、世界中のすべてのクリスチャンの普遍的な教会とも表現できます。教会では、週の初めの日（日曜日）に集会がもたれます。ユダヤ教の旧約聖書で定めている安息日ではありません。

初代教会時代には、聖徒達は家庭に集まっていました。 **ローマ16:5;**
フィレモン(ピレモン)

2節 「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」

使徒**2:42** とあります。クリスチャンが、定期的に教会の会員として集まるということは、主の御心にかなっていることがはっきりと分かります。ヘブライ**10:25**

に「ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず」とあるように、集会をやめてしまわないように注意しています。またそれ以上に、新約聖書の大部分は、キリストの体の一部である教会員として、与えられた特権と責任があることを教えています。 **1コリント12章**

このように教えられてはいますが、どの交わりにつながればよいかということは、クリスチャンになったばかりの人にとって問題となります。なぜなら、クリスチャンのグループが数多く存在し、それぞれの教えには、大きな違いが

あるからです。

次に書かれた項目は、信じてまもない人に、正しい教会を見出す助けとなります。同時に注意すべき点は、このような問題は、神様のみ心がはっきりと分かるようにたずね求める真剣な祈りによって、答が得られるのです。教会とは何かということに対する理解は、常に神様のみことばに基づいたものでなくてはなりません。人間の伝統や習慣は、聖書の教えに沿って吟味する必要があります。イザヤ**8:20**

偽物は、できる限り本物に似せて作られますが、その偽物を見分けるには、本物を知ることが一番ということをお忘れください。神様のみことば（聖書）で本物を見分けようとする時、神様はあなたを導いてくださるので、一つの教会を神様が定められた条件によって確かめてください。

A. あなたが仲間に加わろうとするグループが、聖書は神の靈感によって書かれ、一つも誤りのない神のことばだと認めているかどうか、また、信仰と実践の全ての点において、聖書を最終的な権威としているのかを確かめましょう。聖書が神のことばを含んでいるというだけでは、十分とは言えません。聖書は、神のことばなのです。ですから、聖書は絶対的に真実であり、私たちはそれを信じ、従う必要があるのです。 **2テモテ 3:16-17**

B. あなたが共に集おうとしている人たちは、キリストを誰だと信じているか確かめましょう。多くの方は、キリストを立派なリーダー、または教師として、また、おそらく最高に素晴らしい人間として認め、「神聖な」ということばすら用いる人もいます。しかし、私たちの恵み深い救い主に関する偉大な真理は、キリストが神である、という何にも変えがたの真理なのです。 **コロサイ 2:9**

C. 三番目に特記すべき点は、キリストの成し遂げられたみ業に関する正しい教えです。聖書は、イエス様が全く罪を犯さず、私たちの罪のための身代わりとなって、自らカルバリの十字架上で死に、葬られ、そしてよみがえり、**1コリント 15:14** 天に昇られ、そこで今も神様の右に座しておられる **ヘブライ 1:3**

と教えます。救いは、ただキリストへの信仰によってのみ与えられ、人間のどのような功績によっても得られません。 **ガラテヤ 1:6-9**

9 キリストの血についてどのように教えられているか、はっきりと確かめてください。その血なしには罪の赦しはないからです。そして、以上の三つの条件が満たされていることに加えて、その教会が、ことばや行いにおいて矛盾していないか確かめる必要があります。

教会における秩序

A. キリストは教会の頭です。 **コロサイ 1:18-19; エフェソ (エペソ) 1:22-23**

この立場に立つことは、ほかの誰にもできません。キリストを頭として認められている教会は、キリストを仰ぎ、たゞひたすらにキリストの指示と導きを求めます。

B. 全ての信者は、キリストの体の一部です。 **1コリント 12:12-13**
真の神様の子供であるなら、誰でも教会の交わりに歓迎されています。（ただし、次の二つの場合を除きます。誤った教義に立っている人（**2ヨハネ 10章**）
罪を犯し続けている人（**1コリント 5:13**）は、神様に立ち返るまで除外されるべきです。） まだ信仰を持っていない人は、教会運営の中に入るべきではあ

りません。

C. 全ての信者は、神様の祭司です。 1ペトロ 2:5-

9 新約聖書では、祭司と人々の間に違いはありません。旧約聖書では、祭司は民のためのいけにえを捧げる者として、神様と民の間に立つ仲介者として立てられていました。しかし、キリストの死によって、神様との間の垂れ幕が裂かれたので、今は全てのクリスチャンが、いつでも直接神様に近づくことが許されています。 マルコ15:27-38

私たちは皆、神様のみ前で祭司となりました。 黙示録1:5-6
全てのクリスチャンは、信仰によって、讚美と礼拝と奉仕を通して、神様の前に進み出ることが許されています。初代教会時代には、教会員誰もが神様のことばを学び、福音宣教に励み、神様のために忙しかったわけです。このような良い点は、今日の教会にも欲しいものです。

D. 聖霊の権威は、認められなければなりません。礼拝、奉仕、宣教、弟子訓練において、聖霊が自由に導いてくださる必要があります。聖霊の導きと権威は、人間の制定した儀式や組織に束縛されるものではありません。

2コリント3:17; エフェソ (エペソ) 4:3

まとめてみると、クリスチャンになってまもない人は、聖書を唯一の基準とし、キリストの人格とその成し遂げられたみ業を正しく理解し、教会と教会の役割について新約聖書が教えていることを実行しようとしている人々と、交わるべきだといえるでしょう。

神様のみ心を求める

第22章

神様のみ心を求める

日常生活の中で、クリスチャンはどのように神様の御心（みこころ）を知ることができるのでしょうか。クリスチャンは誰でも、自分の人生における神様の御心を知ることに関心であるべきです。神様のご計画を理解し、それに従って生きていかなければ、私たちの人生は無駄に終わってしまいます。そのような人生は、私たちの主人、つまり神様から「よくやった」と言ってもらえません。聖書では、神様はみ旨を求める人に必ずその御心を示されると、はっきりと教えています。 ヨハネ 7:17

これは、クリスチャンであるなら誰でも経験したことのある特権です。 ローマ12:2

一時的な問題に対する助けであれ、一生の大仕事であれ、神様の御心を求めるには、委ね、罪の告白、祈り、学び、そして待つことの5つが大切です。

A. 委ね それは神様のみ前に自分自身をあずけることであり、自分の個人的望みや志や願望などを第一とせず、ほかの何にもまして、神様の道を求めることです。パウロは「主よ、あなたが私にして欲しいことは何ですか」と尋ね、自分を神様に委ねました。イザヤは「私がここにおります。わたしを遣わしてください。」と言って、神様に自分を委ねました。 歴代17:16
に「主に進んで身をささげた」と書かれてあるように、アマスヤもまた委ねていたことが分かります。

B. 罪の告白

私たちが神様のみ心のただ中にいたいと思うなら、どのような隠れた罪も、それはやめたくない罪であっても告白し、そしてそれらの罪から離れることが必要です。「わたしが心に悪事を見ているなら、主は聞いてくださらないでしょう。」

詩篇**66:18**と書いてあることを思い起こしてください。また私たちは、自分が無力でどうしようもない存在であることを告白し、神様のみ力に頼らなければいけません。詩篇**139:23-24**

そして、人々の前でキリストを言い表すことも大切です

使徒**1:8**

C. 祈り

これは簡単に言えば、定期的に神様のみ前に行き、神様の指示を仰ぐことを意味します。神様が言われたことを成就してくださるよう求めながら、神様の約束を絶えず心に留め、導かれる必要があります。祈りの究極的な目的は、主の栄光を表わすためです。

D. 学び

神様のみことばを理解するために、できるだけ時間を費やしましょう。みことばを通して神様が語ってくださるよう、祈りながら読みましょう。じっくり考えながら、期待して読みましょう。2テモテ **2:15**

E. 待つ もし神様がすぐに答えてくださらなくても、待ちましょう 詩篇**62:6** 祈っても導きの答が与えられない場合には、今あなたが召されているその場にとどまることが、神様の導きです。本当に神様に信頼しているのであれば、急ぐことはないはずです。「信ずる者は慌てることはない。」のです

イザヤ

28:16

神様はいくつかの異なる方法（下記参照）で、私たちにみ旨を示してください。ある時は、その内の一つの方法で、または、それらを一緒に用いられることもあるでしょう。

(1) 聖書を通しての導きこれには二通りあります。一つは、聖書はある種の行為をはっきりと禁じています。たとえば、クリスチャン男性が未信者の女性との結婚を望んで祈っているならば、**2 コリント 6:14**に、神様の答を見出すことができます。二番目は、正しい方向を示すために、神様は聖書の箇所を用いられることがあります。今まで気づきもしなかった聖書の個所が、新しい意味をもってくるということがあります。どうすべきか祈り求めていたことへの答えが、まさしくその時与えられるのです。

(2) クリスチャンを通しての導き時として、成長している霊的なクリスチャンの助けを求めることは、役に立ちます。彼らの経験と教えが、若い人を悲惨な失敗から救ったということが、しばしばあるからです。

(3) 状況を通しての導き神様は、宇宙全体を支配しているので、私たちの人生の様々な出来事を用いることができになり、またしばしばそうされます。手紙、電子メール、ラジオやインターネットのメッセージを通して、行く必要のある道を示すような情報が、その時にまさしく届くということもあります。聖霊を通しての導き

(4) 神の霊（つまり聖霊）は、私たちの確信、願望、好みに働きかけ、神様のみ心をはっきりと示すことができます。このような場合、神様の導きは明ら

かなので、その導きを拒否することは不従順と同じことになります。使徒**11:12**;
16:6-7

(5) 神様があなたに光を与えてくださるなら、その光の中を歩んでください。
使徒

26:19 一つ一つの導きに忠実な人に、導きは続けて与えられます。従うことこそが、真の幸福と永遠の価値がある人生の基礎なのです。

祈り 第23章 祈り

聖書は、祈りについて何と言っているのでしょうか。 クリスマン生活は、祈りなしにはどんな場合にも成長することができません。ですから、新しいクリスマンにとって、祈りについて聖書が何と教えているかを知ることが、とても重要なことなのです。祈りに関する最も代表的な質問の答えは、次の通りです。

I. どうして祈るのでしょうか。

聖書が、祈るように命じられているからです。 **1テモテ2:8**
主イエス・キリストは、祈りの人でした。もしイエス様がその必要を感じて祈っていたのであれば、クリスマンはもっとそうあるべきでしょう。
1テサロニケ5:17-18; エフェソ (エペソ) **6:18**

II. どれくらい祈るのでしょうか。

必ず、毎日決めた時間に、またその決めた時間以外に祈るのもよいでしょう。朝起きてまず祈り、寝る前にも祈りましょう。そして、1日の中で問題が起こったとき、助けがいるとき、知恵が必要なとき、または感謝したいとき、神様のみ前で祈りましょう。ネヘミヤは、城壁を修復するという大事業の中で、「短い祈り」を何度も捧げました。もちろん、クリスマンはだれでも人前でも家でも祈り、食事の前には頭を垂れ、感謝の祈りを捧げるべきです。

III. どのような姿勢で祈るのでしょうか。

ダニエルはひざまずいて祈りました。 **ダニエル書6:10**
イエス様も、同じようにひざまずいて祈られました。 **ルカ22:41**
ネヘミアは、王の前で起立したまま祈りました。 **ネヘミア2:4**
ふつうクリスマンは、家では祈る時ひざまずいて祈りますが、通りを歩きながらや日常の活動の中でも、神様に祈ったり話したりできるという素晴らしい特権が与えられています。

IV. 何のために祈るのでしょうか。

この質問の答えは、フィリピ (ピリピ) **4:6**; **1テモテ2:1-3**;
マタイ9:38にあります。祈りの課題には、小さすぎる祈りや大きすぎる祈りはありません。

多くの信者は、祈りの課題を一覧表にして、それに沿って祈ると祈りやすいと言います。祈る課題には、次のようなものがあげられます。(1) まだ救われていない友達や親戚の人のため。(2) 病気や助けが必要な人のため。(3) 宣教師、伝道者、教師といった、主に仕えている人々のため。

祈りの中では、神様への感謝と賛美を忘れないようにしましょう。また、常に神様の栄光のためであるように気をつけましょう。祈りが具体的であればあるほど、答えられたことが具体的にわかるでしょう。反対に、具体的に名前をあげて祈らなかったとすれば、その祈りが応えられたかどうかはわかりにくいと思います。

V. 答えられる祈り

もし、私たちがキリストにつながっているならば、私たちの祈りは答えられます。ヨハネ**15:7** キリストにつながるとは、キリストの約束を守ることです。

A. 私たちの祈りは、神様のみ心に適っていなければいけません。 **1ヨハネ 5:14** 聖書には神様のみ心が書かれているので、祈りも聖書にそってなされるべきです。

B. クリスチャンは、イエス・キリストの名によって祈ります。

ヨハネ **14:13 ; 16:23**

私たちが、イエス様の名によって真実に祈るならば、それは、イエス様ご自身が神様に祈られることと同じこととなります。

C. 私たちの動機は、純粋であるべきです。 **ヤコブ 4:3**
もし、自分勝手や罪深い動機から祈るならば、答えられることは期待できません。

VI. どのようなことばを使うべきでしょうか。

私たちは神様を畏れ、尊敬のことばを使うべきでしょう。クリスチャンはよく「お父様」、「イエス様」、「聖霊様」のように様をつけて呼びます。正式な祈りでは、「汝」を使うこともあります。

VII. 祈るときに、気をつけること

A. 人に見せるために祈らない。 **マタイ 6:5-6**

B. 自分でできることは、神様にしてもらわねえ。

たとえば、車道に飛び出し、足で歩けるにも関わらず、「歩道に戻してください」というような祈りを、健全なクリスチャンはしない。

C. 自分が持つべきものではないと分かっているながら、神様にそれを与えてくださいと求めない。神様は時々そのような祈りにも答えられ、与えられることがあります。魂が満たされない結果を招くこととなります。 **詩編 106:15**

D. くどくどと、意味のないことを繰り返さない。

マタイ 6:7; コヘレト (伝道) 5:25

VIII. その他

A. もし祈りに集中できず、雑念が入ってしまう場合、声に出して祈ってみましょう。きっと祈りに集中できるでしょう。

B. すぐに答が与えられなくても、がっかりすることはありません。神様の答を待つという恵みもあるので、神様の答が早すぎることは決してないし、神様を無意味に信頼しているわけではないので、神様の答が遅すぎることも決してありません。

C. 神様のくださった答が、あなたの求めたものと違う場合、神様は、私たちが求めたものよりも、優れたものを与えてくださる権威をお持ちだということを知っておきましょう。私たちは、自分に何が最善であるかを知りませんが、神様はごぞんじです。そして、私たちが考えもつかないようなすばらしいものをくださいます。 コリント**12:8-9**

証しと勝利 第24章 証しと勝利

クリスチャンは、ほかの人をどのようにキリストへ導くことができるでしょうか。失われた魂をイエス・キリストに導くことは、今日の世界では最高の仕事です。箴言**11:30**

失われた魂を導くのに、確実に簡単な方法はありませんが、とても重要な原則がいくつかあります。証をするときは、霊的戦いがあります。戦いに行く前には、エフェソ (エペソ) **6:11-18**にある神の武具の一つ一つを、身につけましょう。

I. まず、導く人自身が、霊的によい状態であることが大切です。みことばに絶えず満たされており、多くの時間を祈りにさき、神様に委ねましょう。罪を悔い改め、どんなに誘惑があっても、あらゆる罪から遠ざからなければなりません。聖霊に導かれて歩む時、神様が、証をする適切な機会を与えてくださることが分かります。このことは、言うまでもなく「神様にあって生きる」ことを勝ち得た魂の黄金律です。マタイ**4:19** クリスチャンの生活は、良きにつけ、悪しきにつけ、たとえ平凡であっても、日々、証の連続であることを心に留めてください。

II. 一日の初めに、導いて欲しいと願っている人に出会えることを、神様に祈ることはいいことです。会う人ごとに神様の話をするには、もちろんできません。人の魂が「救いの時」に来ていると、知ることも明らかではありません。でも、もし神様が導いてくださるなら、効果的に証をすることができるし、より多くの実を神様のために刈り取ることができるでしょう。

III. 一日の中で、キリストのために話す機会を持ちましょう。たとえば、同僚が神様のみ名を冒瀆 (ぼうとく) した場合でも、すぐ機転を利かせて、愛のあることばで証をする機会としましょう。宗教の話題は、よく会話の中に出てきますが、そういったことをよく活かすべきです。機会がやってくるのを待つだけでなく、自分から作り出すこともできます。世の中の人々は、政治、スポーツ、天候のことをよく話します。クリスチャンが、贖い (あがない) 主であるイエス様のことを話すのは、当然でしょう。

IV. できる限り御言葉（みことば）を引用しましょう。その人に、御言葉を読んでもらうのも、効果的です。

神様のことばは生きています。そして聖霊の剣です。 ヘブル4:12
人のことばでは動かされない魂にも、語りかける力があるのです。まだ救われていない人は、聖句を朗読すると、それを何とか止めさせようとするかもしれませんが、止めないでください。もし聖書を信じていないと言った場合でも、聖書から引用しましょう。聖書は、種蒔きと刈り入れについて教えています。種蒔きと刈り入れには時があり、収穫は神様が与えられるのです。蒔かなければ、刈り入れもありません。種であるみことばを、あまねく広く蒔きましょう。
。 マタイ 13:4-8

V. 一つ一つの関係を大切にしましょう。福音を初めて聞いて、その場で信じるという人はまれです。多くの場合は、何回も何回も聞く必要があるので、寛容になりましょう。トラクトをあげたり、キリスト教の集会に誘いましょう。そして何よりも、その人達のために祈りましょう。相手が怒ったり、敵対しても落胆することはありません。反抗的になるというのは、多くの場合、聖霊による罪の自覚が生じている証拠です。逆に、無関心な人ほど、キリストに導くのは大変です。

VI. 決断をすぐに迫らないようにしましょう。早まった信仰告白は意味がないだけではなく、その人自身を惑わすことになりすし、キリストが原因とされるような大きな危害になりかねません。あなたが種を蒔くのに忠実であれば、神様は、誠実に収穫を増やしてくださいます。 ヨハネ4:35-38

VII. 人にイエス様のことを伝えるのがむずかしく感じられるならば、神様にそのことを話し、証する力と勇気を与えてくださるよう祈りましょう。もし、あなたが真に願うなら、神様がその力を与えてくださいます。 マタイ10:32

VIII. いつも、十分なトラクトを持ち歩くようにしましょう。会う人ごとにトラクトを渡すことだけでなく、車やバス、レストラン、ほかの公共の場所に置いておくこともできます。

人をキリストに導くことは、すばらしいことです。(1) ことばでは表せないほどの喜びが、まずこの地上においてあります。 ルカ15:10

(2) 天国で、「あなたが、私をここに招いてくださったのですよ」と誰かに言われた時の、天における喜びはいかばかりでしょう。(3) 主イエス・キリストが、天に集められた会衆一同の前であなたを認めてくださったときの感動は、何にも比べられないでしょう。 マタイ10:32

これらのことをよく考えて、私たちの祈りが絶えず次のようでありますように。

私の救い主がご覧になったと同じように、
私も人々を見ることが出来ますように。
あふれる涙で目がかすみ、見えなくなるときまで。
迷う羊を哀れみ
神の愛を持って、その羊たちを愛せますように。 マタイ9:36

聖書の探求 第25章 聖書の探求

クリスチャンは、聖書について何を知るべきでしょうか。聖書の学びは、聖霊の完全な導きによってなされなければなりません。聖霊は、クリスチャンの教師なので、聖霊の導きをいつも求める必要があるのです。 ヨハネ**14:26; 16:13**

早く、しかも簡単に学ぶ方法はありません。だれにとっても、大変なことです。しかしながら、聖書の著者である神様は常に共におられ、聖書の筆者よりも書かれている内容をよく知っておられることを忘れてはなりません。もし理解できないときは、神様の教えを祈り求めてください。ヨハネ**14:26**

I. まずはじめに、毎日聖書を読む時間を決めましょう。

新約聖書のマタイから始め、新約聖書を通読するのがよいでしょう。旧約聖書の創世記から始め、そして聖書全部を読んでください。「聖書を通読したことがある」と言うために読むのではなく、聖書が語っていることを知るために、読んでください。

II. 分からない語句は、辞書で調べてみましょう。

もし分からない箇所につづいたら、まずはそこを注意深く調べて、意味を理解するように努めます。それでも分からないときは、どこかに書いておき、機会があるときに注解書で調べてみましょう。

III. その聖句を、ほかの聖句と比較してみましょう。

一節だけを抜き出して、教義を立てないようにしましょう。その問題について、聖書全般の一貫している教えを見出しましょう。「真理は、ほかの真理と矛盾することはない」

IV. 下記の質問を用いて、各章ごとの要点をまとめて書き出すとよいでしょう。

- A. キリストについて何を学びましたか。（旧約聖書においても救い主に関する表現、隠喩を見つけることができます。
- B. その章の主要なメッセージは何でしたか。
- C. どのような貴重な約束を見つけることができましたか。
- D. 注目すべき節はどこですか。
- E. どのような罪をしないように教えられていますか。
- F. 見習うべき模範は何ですか。
- G. むずかしい節はどこでしたか。

V. その日に、読んだ箇所について、ほかの人と話してみましょう。

それには、二つの目的があります。その日の学びをしっかりと覚えられ、また

、聖書の学びから受けた祝福を、ほかの人に分かちあうことができるからです。
マラキ 3:16

VI. 毎週、2

～3節の聖句を暗記しましょう。

ヨハネ1:12; 3:16; 3:36; 5:24; ローマ10:9
など、よく知られた箇所から覚え始めます。全ての暗唱聖句が心と精神にしみこみ、真に自分のものとなるまで繰り返し復習しましょう。名刺サイズのような小さなカードに書いて、いつでも復習するのに持ち歩くと良いでしょう。こうすることによって、自分自身の生活が豊かになることがわかり、ほかの人にもよく話せるようになるでしょう。

VII. 聖書の学びの最大の目的は、言うまでもなく、学んだことを実践することです。

クリスチャンは、みことばによって戒められ、正され、イエス様に似る者へと変えられていく必要があります。エレミヤ 15:16
聖書を学ぶとき、とこしえに変わることのない書物を学んでいることを忘れないでください。聖書から学ぶすべてのことは、永遠に対する備えです。ぜひ最善をつくしましょう。

意義ある人生 第26章 意義ある人生

クリスチャンとして価値ある人生を送るには、どのようにすればよいのでしょうか。クリスチャンが救いを失うことはないといっても、人生を無意味に生きているなら、永遠の救いは何の価値もなくなるでしょう。「愚かな人には、永遠の計画がない。」と言われている通りです。人生が無意味になるような悲劇を避けるために、聖書は次のようなことをクリスチャンに助言しています。

I. キリストの弟子となることに伴う代価を考えましょう。

クリスチャンは神様の子供ですが、全員が弟子というわけではありません。弟子の条件は、マタイ10:16-42 とルカ14:23-25
に説明されています。弟子であるということは、快適さやこの世的な保障はありません。自分を捨てる人生を意味します。この世から敵視されたり、ばかにされることもあります。全てを捨てて、イエス様に従うことを意味するのです。

II. 神様に対して、自発的献身をする。

ローマ12:1 自分の体を生きたいけにえとして、神様に捧げる決意をすることです。神様のしてくださったこと全てを考えると、これこそが私たちのなすべきことなのです。偉大な宣教師C.T.ストッドは、かつて言いました。「イエス・キリストが神様であり、私のために死んでくださったのなら、彼に捧げる私の犠牲に、大きすぎるものはありません。」

III. キリストのために、自分のいのちを捨てましょう。 救い主イエス様は、「私のために命を失う者は、それを得る」 マタイ16:25

と言われました。言い換えれば、もし人生の満ちあふれる喜びと幸福を得たいと願うなら、自分自身ではなく、イエス様の喜ぶ生き方をしましょう。自己中心的な生き方をする人は、みじめで不幸なです。

IV. 今までの生活に見切りをつけましょう。「祭壇の角のところまで、祭りのいけにえを綱でひいて行け。」 詩篇**118:27**
と書かれているように、神様への全身全霊を懸けた従順と献身の生活によって、できるかぎりあと戻りができないようにすべきです。ルカ**9:23**

V. 横道にそれないようにしましょう。多くの人は、すばらしいスタートを切りますが、やがて希望を失って挫折し、古い習慣に逆戻りしてしまいます。給料のよい仕事や物質主義、興味深い職業、そして多くの不道德な誘惑が、真の道からそらそうとします。また、弟子になれるはずだった人の多くは、賢明でなかった結婚がつまずきとなっています。悪魔は、神様が備えられた道からあなたをそらすために、どんなことでも、また誰でも使うのです。イエス様は、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」 ルカ**9:62**と言われました。

VI. 仕えるために生きましょう。イエスは「仕えられるためではなく仕えるために」来られました。 マタイ**20 : 28**
他者に仕えることにこそ、真のすばらしさがあります。受ける側にならないでください。「受けるよりは与える方が幸いである。」 使徒 **20:35**

VII. 全ての主である方を、王とする。キリストが、あなたの人生を支配されているのなら、真の意味で、一日一日は永遠に価値あるものなのです。キリスト教は「楽しい気晴らしではなく、熱心な探究」ですから。また、たやすい人生ではなく、戦いなのです。クリスチャンになるには、一銭も必要ありませんが、クリスチャンであり続けるためには、全てをささげます。人気集めではなく迫害があり、快適さもなく十字架があるのです。しかし、それは最高の人生です。最高の主人に仕えています。その報酬は最高であり、もちろんその報酬のよさよりも、あなたはその仕事が好きになるでしょう。報酬は、現在も永遠においてもすばらしいものです。

だからこそ、キリストに人生を捧げることをお勧めします。自分に固執せず、最高のものを捧げてください。最後のときに、「忠実な良い僕だ。よくやった。...主人と一緒に喜んでくれ。」
マタイ**25 : 21**とイエス様がねぎらってくださることこそが、あなたにとって何よりの喜びでありますように。

この本は、アメリカ合衆国ノースカロライナ州シャーロット市にあります**BB N**聖書放送が、特別にあなたにお届けするものです。www.bbnnet.comにおいてダウンロードできます。次の二つの聖句を実行するために、あなたのお役立に立てば幸いです。

「あなたは、適格者と認められて神の前に立つ者、恥じるところのない働き手、真理のことばを正しく伝える者となるように努めなさい。」 2テモテ**2:15**
「キリスト・イエスの立派な兵士として、わたしと共に苦しみをしのびなさい。兵役に服している者は生計を立てるための仕事に煩わされず、自分を召集した者の気に入ろうとします。また、競技に参加する者は、規則に従って競技をしないならば、栄冠を受けることができません。」 2テモテ**2:3-5**